平成 27 年度　公益財団法人 JKA　お年寄りが幸せに暮らせる社会を創る活動

奈良・東広島ワークショップ　報告書

自由なくらし。自分らしく、ともに住まう。

―地域をつくるグループリビング―

高齢者グループリビングは、みずから暮らしをつくる楽しみと自由が含まれる居住スタイルです。グループリビングが地域にとけこみ、居住者が地域の人々と交流することで、暮らしの楽しみと自由がひろがり、豊かさの実現につながっています。

今回のワークショップでは、グループリビングが地域から恩恵を受けるだけでなく、グループリビングが地域に貢献できる側面に注目し、どうすればこの側面を大きくしていくことができるかを考えます。「地域をつくるグループリビング」という視点にたって、グループリビングのあり方を話し合いたいと思います。

ここでの議論を通して、運営者、生活者、サービス提供者、これからグループリビングを作ろうと考えている方々、研究者、行政の方々など、それぞれがグループリビングの意義を再認識する場にしたいと考えています。

主催　社会福祉法人福島福祉会
共催　社会福祉法人秋篠茜会・NPO 法人人間大好き
　　グループリビング運営協議会
後援　財団法人 JKA・
　　慶應義塾大学 SFC 研究所地域協働・ラボ

目　　次

奈良ワークショップ

講演１　中里　寛美氏　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

講演２　星川　光子氏　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

講演３　宮野　順子氏　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

講演４　向平すすむ氏　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

東広島ワークショップ

講演１　羽田富美江氏　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

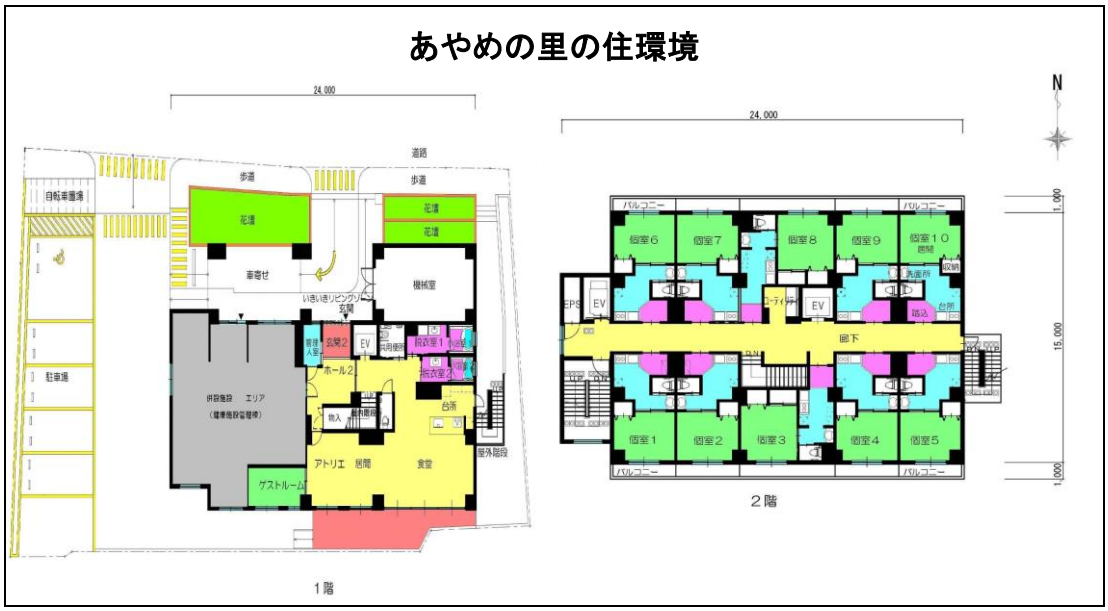
講演２　渡邉　壽江氏　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37

講演３　清野　恭子氏　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42

奈良ワークショップ　講演１　中里　寛美氏

あやめの里の暮らし

～安心して健やかに。そして自分らしく暮らしたい～



この建物自体は 2009 年の４月から運用を開始したんですけども、あやめの里の住居環境は先ほど見学して頂きましたけれども、大きく分けて１階が共用ゾーン、２階が各個室になっているプライベートゾーンという形になってます。個室の設備としてはトイレとミニキッチン・・・ミニキッチンと言っても使い勝手としては結構大きいキッチンかなと思うんですけども、それと洗面台とクローゼット・・・あと本当に学生さんの１K という感じですね。全体で８畳ないかなというぐらいのスペースになっております。１階のところは見てもらった通りかなと思います。

今日入居者さんがいらっしゃったんですけど、実はこの内容去年法人内で報告したものを報告させて頂いているんですけども、お部屋なんですけども、O さんのお部屋っていうのが気づいたら棚とか自分でこしらえてはって、もういろんなものが・・・この O さんっていうのは開設前に契約をして下さって、４月の１日からもう引っ越しをして来てくださった方です。もうすぐそこに一人暮らしをされてる方だったんですけど、本当にオープンと

同時に来て下さって、もうその方が５年も経つともう生活がこんなにできているという感じですね。テレビのところでごろ寝とかしてはる様子なんですけども、あとＫさんっていうのがうちのデイサービスの方に要支援の認定を持っていらっしゃいますので水曜日と金曜日の２回、リハビリに来てもらっています。入られた時は杖とかついていないんですけども、もうよたよた歩きで、本当にこけはったらどうしよと心配だったんですけども、今はもうしっかり歩かれて、もちろん送迎も無しで玄関を出て、玄関に入ってきてという形で来て下さってます。それでＴさんですね。入居されてすぐの食事の写真で、少し緊張なさってる感じなんですね・・・それで夕食の風景なんですけども、これすごい感動的なんですけども、このテーブルとか椅子は、私が開設前に色んな物品とかも決めさせて頂いたんですね。食卓が埋まるのを一日も早くと夢見てきた中で、この日初めて１０人入られたので、もう本当に嬉しくて嬉しくて、１０人さんがそろった時に写真を撮りにいかせてもらった時の写真ですね。もちろん外食される方もいらっしゃるし、そうでない方もいらっしゃるし、色んなコミュニティができますので、本当に早食いの方にはゆっくり食べなさい、とか佃煮食べるよ、とか言って持ってきて配ってはったりとか・・・なかなかコスト面の関係から、食事はそんなに、そんない・・・まあ不満も出ますね。そのコスト面と出せるところの間で今上手く落ち着いているっていうところなんですけども・・・

入退居状況（2009年4月～2014年10月）

年/月	09/04	09/07	10/08	10/12	11/02	11/06	12/02	12/11	13/02	13/05	13/06	13/07	14/01	14/05	14/07
新規	4	1	1	1		1			2		1	1	1	2	1
退去		1			1		1	1		1			1		
計	4	4	5	6	5	6	5	4	6	5	6	7	7	9	10

【入居募集活動】
●2009年4月オープン時は4人での生活がスタートしました。しかしながら3か月後の7月には1名が退去されました。同月1名入居者があり、4名のまま約1年が過ぎました。
●入居者募集に関しては、インターネット広告、地域包括支援事業所・居宅介護支援事業所、協力団体などを通じて案内活動を行ってきました。
【入居者状況】
●インターネット広告・チラシ・・・4名
●居宅・包括CM等の紹介・・・4名
●法人職員・協力団体等からの紹介・・・5名

【入居相談の内容】
●3食の食事提供
●職員の常駐（緊急時の対応）
●入居一時金が高い。
●月々の生活費が高く年金では生活ができない。
●介護が必要になったら退去しなくてはならないのか。
●併設の運動施設が使えるのか。
●入居者との共同生活になじむだろうか。

先ほど申しあげましたように、２００９年の４月にオープンしたんですけども、勿論その前に入居者募集はしていたんですが、オープンした時には４名様しか契約ができなくて、４名様でスタートしたというところなんです。しかしながら、思っているのと違った、ということですぐ３か月後の７月に１名退去されたという感じなんですね。それで同月、また別の方が入って来られたので・・・ただ１年間は結局４名さんのままということで、これはやばいということで、本当にケアマネさんが居宅介護事業所とか、地域包括とか地域団体とか色んな高齢者の集まりのところにチラシを持っていって、事業の説明とかチラシの説明の活動をしたんですが、なかなか希望者さんが・・・見に来はったり、資料請求はあるんですけども、やっぱりなかなか決断されないというところで、なかなか実際の利用契約、希望契約というところまでには至りませんでした。それはなぜかって言うと、当初ですね、いわゆる高齢者マンション、バリアフリーで防災設備が整った、運動設備が併設

した高齢者施設マンションみたいなのがあって、中のソフトがなかった、ということで、食事の提供に関しては有料老人ホーム、そういった法制度の関係上もあるので、施設で提供してます、って言えばいいと・・・委託型という風になるところがなかなかわかってもらえなくて、職員も常駐させておりませんでしたので、やはり何かあった時の不安さというところに、「え、職員がいないんですか。別のところさがします。」っていうところで、そういったソフト面ですね・・・そしてちょっと開設時にですね、償却とか建築面でのコストとかもありまして、一時金、これは預り金で、１０年契約で償却していく分なんですけど、一時期２００万に設定しておりました。これはやはり、月々のものは出せるんやけども、一気に２００万円は出せないていうことがここらへんの近畿圏内ではありました。

このままでは・・・入居者が去ってしまわれる！！

2012年10月22日の出来事 H・Y氏　当時90歳　2009年7月入居される。入居時介護認定区分要支援2

H氏息子さんより、電話にて11月中に退去の意向の連絡がありました。理由としてあやめの里での生活が困難となっているとの判断で、ご本人と相談のうえとのことでした。

《具体的に困っていること》

- 食事を3食提供してほしい（配膳や片付け）
- 入浴時の見守りや環境整備（お湯はりや共用部分の掃除）

→ヘルプの訪問介護の導入（介護保険・自費利用）について

- 部分的な援助ではなく日常生活全般に見守りが必要であり一部介助も必要と感じている。
- （息子さん・・・転勤のため週末に奈良へ帰られる。奥様も働いておられる）週末に訪問しているがそれだけでは、心配である。

2012年11月

この間、息子氏との短時間での電話連絡のため再度帰省時に面談の打診をしました。改めて介護サービスの利用等話をさせていただきましたが、そもそもあやめの里の機能に「見守りや生活援助、緊急時対応が含まれる」と思われていました。支援体制のある住居を探すとのことで退去の意思は強く、数日後手続きを行いました。

サービス付き・・・課題解決へ！

入居者の生活の安定と安心の暮らしそれが入居率の課題を解決

検討会を開催

→こがねの里施設管理者・在宅サービス職責者など、課題解決の具体策を検討

- **食事**

食事作り・・・こがねの里ヘルプの委託から魚国さんに変更（コスト調整）

配膳・片づけ・・・こがねの里ヘルプにより温め・盛り付け（必要に応じて時間に呼びに行くなど）

▷ 生活支援・緊急時対応

・共用部分の掃除・・・こがねの里ヘルプへ委託

・安否確認・・・あこだ職員、こがねの里ヘルプに　より日中1回～2回訪問

・緊急通報システムの導入・・・携帯電話端末を各部屋に設備（ワンプッシュボタン型）①こがねの里待機②あこだ・あやめ管理者③こがねの里管理者へ送信

▷ 新規入居契約へ

それでやっぱり介護が必要になったりとか、入居者同士の共同生活ってなんですの、とか、本当に仲良くやっていけるのかな、とか、グループリビングがあまり関西にはなじみがな

かったっていうところが、この事業体事態を分かって頂くということ自体に時間を要しましたし、どういう風にお伝えしたらいいんかな、っていうところは本当に頭を悩ませたところです。そんな中、２０１２年のところで、ひとり、この方も開設の年に入られた方なんですけども、息子さんから本人をもう退去させます、ということでいきなり電話がかかってきて、息子さんがこの奈良にお住まいなんですが、ほとんど東京に転勤のような形で、月に何度か週末にこっちの奈良の綾部に帰ってきてお母さまの様子を見られるという感じだったんですけども、突然そう言ったご連絡がありまして、要はですね、お母さま、その時もうだいぶご高齢だったんですけども、なかなか食事を・・・当初はですね、自分で食べた食器は自分で片づけましょうということで、そこまでの委託は見込めていなかったので、食事の提供はやってその後片付けとかは自分でやって頂くということをやってましたし、共用スペースのお掃除に関しても、頑張って自分らでできる範囲はやります、っていうことで自分たちで頑張ってはったんですけども、その方は高齢で、もともと要支援２の認定を持っていらしたんですけども、サービスを使ってらっしゃらなかったんですよ
ね・・・それでなかなかしんどくなってきて、入浴とか食事、生活全般に見守りが必要になってきている中で、介護保険どうこうって言うより、あやめの里というか住宅そのものにそういうサービスはなかったのか、という話に息子さんがなりまして、その辺のコミュニケーションというか理解がなかなか難しいなというのが・・・介護保険の利用等ですね、ヘルプと連携しておりまして、うちすぐヘルプがそこにおりますし、日常的に委託契約で食事も提供とかもそこでやってもらってましたので、顔なじみにもなってますので、改めて介護保険の利用等の相談をしたんですけども、全体枠的に見守りがある住居がいいということになりまして、退去・・・いわゆるサ高住とかそういうところに引っ越されてしまいました。これをきっかけにですね、あやめの里の機能を考え直すということをやってたら、このままやったら実質埋まらんへんどころか利用者さんに退去されてしまわれるという危機感に・・・課題とかはわかってたんですけど、独りよがりで頑張っていたのかなというところを反省しまして、特養ホームがある、そこの管理者の方に改めてそういう危機感のことを報告しまして、やはりその入居率の課題を解決するチームをつくろうということになりまして、やはり食事とか片づけとか見守りとかの体制をひとつずつひとつずつ整えていこうということで、それは本人様たちになるべく負担が返らないように、安心の機能をつけていこうということで、食事作りなんかにしましてはヘルパーの方にずっと委託をしてたんですけども、特養ホームに入っている厨房さんに委託して食事だけはつくってもらおう、と。配膳するのだけはヘルパーにやってもらおうということでコストを下げるということをして、片付けからは以前までをヘルパーにやってもらうっていうのをほとんど同じ値段でさせてもらっていることや、生活の中での安否の確認とか、共有部分の掃除とか、そういったものをあやめのヘルパーとか職員とかで連携して、本人様たちに人件費等の負担をかけないような仕組みを考えて導入しました。

退院後の安心した暮らしを求めて

～2014年1月～7月に4名と契約締結　10室の契約が完了～

何らかの疾病により入院し治療中に家族などによる相談から始まりました。

⇒必ず入居して頂く！支援体制について在宅サービスの調整・連携

- 4ケースの契約に至った理由

●職員の見守り
●緊急時の対応
●食事の提供
●病院が近い
●運営母体が特養
●家族等の住居から近い
●設備環境（新しい・個室が広いなど）

- Yさんのケース

●大阪府吹田市に一人暮らし。男性
●不規則な食生活と将来を心配した妹さん（相楽郡精華町在住）が2013年2月にインターネット広告にて資料請求・見学に来所され入居相談を受けました。
●2014年3月本人の決心もあり入居契約に向けて準備を進めました。
●診断書作成時病気が発覚しそのまま入院治療開始されました。（2014年3月）
●2014年6月契約。 7月4日入居開始される。
●7月12日土曜日からあかりの家利用開始される。

みなさんの声　～よりよいあやめの里での暮らしを求めて～

- 入居者さんの声（アンケートへのご協力）

●**設備・環境**・・・普通・広い・使いやすい・収納が狭い。よくできていると思う。一人には十分快適。どの施設も差異はない。病院に近いのでとても良い。
●**料金**・・・普通・共益費や食費が高い。夕食500円になりませんか？共益費や生活支援費などの会計報告をしてほしい。入居者の減少により変動するのか心配。
●**運営**・・・24時間対応できる職員を配置してほしい。自治会での介護保険の学習会は、制度活用されている方も多く、いい時期に企画してくれてよかった。馴染みの少ない職員の出入りも多くなり活気が出たが反面他人の家への訪問なのであいさつなど、最小限のエチケットは心がけてほしい。緊急通報端末の使用方法など定期的に練習の機会を設定してほしい。昼間事務所（あこだ）に職員がいるので安心。夜間も他の入居者がいると思うと安心。
●**その他**・・・入居者間での人間関係に気を使う。どの施設も色んな人がいるもの。ヘルパーさんが良くしてくれるので助かっている。入居者の健康レベルの相違もあり足並みを揃えての行事など困難で残念。各自が自由で入居者間のトラブルがなく平和的に暮らしている。食事の提供があり満足。快適に暮らしている。

- 現在の入居相談

・要介護状態で在宅生活が困難。すぐ入居できる介護付きの施設を探している。
・同居家族が病気・他界により一人暮らしとなる。高齢者住宅へ住み替えを考えている。
・生活費が払える範囲、家族が金銭的支援ができる範囲
・職員の24時間常駐（緊急時の対応をしてほしい）

最後にですね、そういった機能をいれることによって、現実的に入りたいというような・・・本当にケアマネさんからも、そういった機能が入れば入ってほしいというような方がいるということで現実的な相談が来るようになりました。やはりそういった見守り機能があるところに入られるということは、なんらかの生活課題や健康課題を持っていらっしゃる方が多かったです。６人まで来ていてもどうしても最後の４人までが埋まらないといった状況の中で、やはり最後の来られた４名の方は持病を持ってはったりとかそういった形が多かったです。それで目の前の病院に入院されている方の退院先を探していらっしゃっていて、まだ空いてるじゃない、ということで紹介してすぐ入ってもらって、という形ですね。それからその人はアルコール依存症で、もう限界だろうということで、かかりつけの病院

が目の前ということもあって、本人さんも納得の上で移って来られたというケースがあります。
　もうひとつは、この人は１０人目の方なんですけど、最終的に入って頂くために、共同生活ですので診断書をお願いしてたんですけども、診断書の作成の時点で感染症、結核ですね・・・重大なところではなかったんですけども３か月くらいの治療で勿論治られたんですけども、でも全然医療と関わっていらっしゃらなかったので、しっかり医療にも関わっていきましょうね、って言ってた矢先の診断書だったんですけども、ちょっと入ってそ来られるまでに時間がかかったというところなんですが、その方が１０人目で・・・やっと７月に入って来られたという状況ですね。ですので昨年の７月にようやく、１０室１０名様での生活が始まったという感じです。

それからそこにたどり着くまでに、やっぱり有料老人ホームとの制度関係との整備とか、サ高住への指定とか、いろんなこととかを考えながらやってきたんですが、やっぱり今関西では家賃 55,000 円で共域費 25,000 円で、生活支援が 5,000 円ですので、固定費として 80,000 円ですかね・・・やはり年金で賄いたいっていう、その年金が大体 10 万ちょっとくらいなんですよね。なのでそれ以上上がるとなかなか入れないという形なので、なるべくコストがいかないように悩みながらの運営だったかなという風に思います。

それで実は今入られてからすごいハードな認知症だったと分かった方がいらっしゃたりとか、入られてから脳梗塞を発症してしまって、とかなかなかこのあやめの在宅生活がうまくいかな厳しい中で小規模多機能とかデイサービスとか、つてがあるところと連携していますので、なんとか気ままな生活を続けさせたいというところの中で、生活して頂いている状況です。

今回色々皆さんにお話聞かせて頂いたんですけども、やっぱり料金的には安ければ安いだけいいという方もいらっしゃいますし、でもその中で嬉しかったのが、ケアマネの機能がうちにありまして、ケアマネが介護保険制度とか、傷害保険制度とか、そういった制度のちょっとした勉強会を開きまして、そういった企画をしてくれるのがすごくありがたい、すごくためになった、ということで、またやってくださいね、ということも言われているんですけども、入居者の身体レベルが変わってきているのでみんなでわいわい鍋をしたりとか遊んだりとか外に出掛けたりとかができなくなってきていることは残念だな、という意見もあります。

こうやってあやめの里は、やっと去年 10 室になりましたので今からやっとスタートに立てたかなという風に思ってます。せっかく特養とか、他の高齢者機能がありますので、本当にこの方々を色んな機能がある安心の中で、いつまでもあやめの中で元気でいてくださいね、といつもお話してますし、自治会で一番初めに入居された O さんなんですけども、本人が希望して家族が許してくださるなら、もし亡くなりはった方が出たら、自治会で送り出してあげたいね、ということも仰って頂いていて、すごく私感動したんですけども、そういった形で、人間関係のトラブルもすごく心配したし、色々悩みながら来たんですけども、なんかうまいこといったかな、っていうのが、つかず離れずの・・・べったり感がないし、寄るべきとこは寄るし、自分の好きなことはそのままに、っていうまさにグループリビングの主旨ですかね。自分らしく元気で居続けるために自分の住まいの在り方が、結果で私自身もわかったかなという状態ですね。これをやはり開設前に説明していくのは難しかったかなと、やっと自分でも説明しながら、こういう住まいの在り方・機能やったんやな、っていうのを、改めて 10 人になった時に気付いたかなという風に思ってます。これ実は去年のこれくらいに説明したんですけど、法人内で説明させてもらったんですけども、最後に入られた Y さんという入居者さんなんですけども、認知機能がだいぶ低下されてい

て外に出たら鍵を持って出ず家に入れなくなったりとか、実際に行方不明になられたことがありまして、あと大阪から来られたので土地勘もなくて、手の空いている職員みんなで探したんですけども、朝いないのが分かって、夕方にやっと無事に発見されたんですけども、本人様とご家族様に許可をもらってちょっと写真を出してもらって、職員みんなで見守ってるよ、ということで締めくくらせてもらったんですけども、実は今も変わりなく生活をされていますので、周りの目があればなんとか在宅生活を続けられるのかなという状態です。はい、とりとめもない報告になりましたが、私の報告は以上です。ご清聴ありがとうございました。

奈良ワークショップ　講演２　星川　光子氏

NPO法人いぶりたすけ愛の活動

幸せを追いかけて

NPO法人いぶりたすけ愛の歴史

- 1995年　設立総会　社協に机を借り在宅サービスと移送・送迎サービス開始
- 1996年　家賃8千円の事務所を借りる
- 1999年　NPO法人の認証おりる
- 2000年　一軒家に事務所移転　介護保険事業開始
- 2001年　コンビニ跡に事務所移転　サロン開始
- 2002年　配食開始
- 2006年　グループリビング「たすけ愛の家」開設　福祉有償運送開始
- 2011年　社会起業家集団「ともかな」オープン

北海道の登別市からやって来ました「いぶりたすけ愛」の星川と申します。大変暑いですね奈良は。脱がせてもらって、座っても宜しいでしょうか。北海道は霜が降りていたものですから・・・こんなに暑いとは・・・。「いぶりたすけ愛」は二十周年を迎えたところなのですけれども、みんなで20年間を振り返って記念誌を作っています。二十年間を楽しく活動できたのは、幸せを追いかけてきたからだと思っていますので、今日のテーマを「幸せを追いかけて」にしました。この「幸せを追いかけて」と言いますのは、市民互助団体の大先輩が「不幸を追いかける会にしてはいけません。困った人を助けようという奇特な人を集めた会は長続きしません。意見の違う人、生き方の違う人そんな人達みんなが一緒になって助けあっていく会にしなさい。」とアドバイスをして頂きました。私がこの会を始めたきっかけは、ボランティア活動で在宅福祉の現実を知り、福祉はどこかで誰かがやってくれていると社会に無関心で生きてきた自分を反省したことです。「自分のできることをしなければ」そう思ってこの会を作りました。みんなで気持よく助け合える、成熟した市民社会を目指しています。ということで「幸せを追いかけて」20年が過ぎました。

NPO法人いぶりたすけ愛の歴史です。 歴史と言うと大げさですね、奈良の歴史のあるところで言うのは恥ずかしいですけれども、1995年に38名の会員を集めまして、設立総会を開

きました。現在は840人くらいの会員がいます。一年目は社協に机を借りて、在宅サービスと送迎のサービスを始めました。その頃の社協というのは、行政の物だと思われていて、民間団体と言うことを理解されていない時代でした。社協に机を借りているとどうしても市の補助的な仕事をしていると思われがちです。それでは自分たちが市民活動をしていこうというのが市民に理解してもらえないと思いましたので、1996年次の年に家賃8,000円の事務所を借りて独立をしました。そして1999年にNPO法人の認証をとり、2000年に介護保険の事業を始めました。私達が在宅サービスを続けてきたことが、介護保険に繋がったのではないかと思ったことと、選択肢が多くあるほうが良いと思いましたので、介護保険事業を始めました。その時8,000円の家賃の大家さんが倒産したものですから、一軒家に事務所を移しました。その一軒家はたいへん古い家で、北海道といっても登別市はそんなに寒いところでは無いのですが、あまりにも家が古いために、朝行ったら水道管が破裂して水浸しになっているんですね、それが何回もあって、もうとてもこんなところにいられない、ということで2001年にコンビニの跡に事務所を移しました。サービスを続けていく中で「家に閉じこもっている方達がいるよね、みんなが出て来るところがあったらいいね。」と仲間と話していました。そのコンビニの跡は、少し広い所でしたので、サロンを始めることにしました。そして、サロンで昼食を出していたんですが、「みんなで一緒に食べると美味しいね。」「食事が美味しい。」と大変評判が良くて、一人の方から届けてほしいという希望がありました。そこで2000年から配食も始めました。当会の配食はお弁当箱ではなくて、籐の籠にお茶碗と味噌汁と、おかず三品を入れて、食卓を届けるというこだわった配食です。そして2006年グループリビングたすけ愛の家が出来ました。これもサービスを続けていく中で介護保険、サロン、配食と地域で安心して暮らすためにいろいろな事業を続けてきましたが、なかなか最後まで暮らすのが難しいという現実がありました。古い細切れの住宅で躓いて転んだりしますと、遠くに住むご家族、横浜とか札幌だったりとかに、泣く泣く引き取られていく方が、何人もいました。自分の老後を考えた時に、みんなで暮らせるところがあったらいいね、ということを仲間と話していました。そんな時にJKさんの補助事業があることを知りました。モデル事業であるＣＯＣＯ湘南台さんを見させていただいて自立と共生という暮らし方に、これは私達が目指している成熟した市民社会だと感動しました。ぜひ作りたいと思い第一回目の補助金をいただき作ることが出来ました。そしてその年に福祉有償運送も始めております。そして2011年には「社会起業家集団ともかな」をオープンしています。今までの事業は全部自分たちが中心となってやってきた事業ですが、「ともかな」は社会起業家になりたい人を応援したいと思って造りました。高齢でも障害があっても助け合って社会起業家になる「共に夢をかなえよう」と言うのが「ともかな」です。これら在宅サービス、サロン、配食、高齢者いきいきグループリビング、社会起業家集団「ともかな」はたすけ愛事業で法律外の活動です。自分たちで考えて自由に楽しく活動しています。優サービスは介護保険事業の訪問介護とケアプラン、そして福祉有償運送をしています。これらは法律内の活動です。法律に従って仕事をしています。

◎たすけ愛事業

あなたの『たすけ』は私の『たすけ』

- 在宅サービス（掃除・買物・草取り・雪かきなど）
- サ　ロ　ン（カラオケ・麻雀・囲碁・パソコンなど）
- 配　食　（日曜日以外の毎日　夕食を届ける）
- 高齢者生き活きグループリビング　（9室）

◎優サービス　指定居宅サービス事業所

- 指　定　居　宅　訪　問　介　護（介護保険・障害者自立支援）
- 指　定　居　宅　支　援
- 　福　祉　有　償　運　送

社会起業家集団「ともかな」

“ともに夢をかなえよう！”
社会起業家集団「ともかな」が地域を変える

社会貢献したいと考える高齢者や障がいを持った人たちが、共に夢を叶えるために自分の知識や技能を活かして、事業や活動を展開する場として共生型基盤整備事業の補助を受けて建築。

〇カフェ＆喫茶（ワンディシェフ）
〇物づくり・販売（駄菓子屋）
〇子育てスペース（子ども劇場「ぴよぴよ」）
〇片親家庭のための住居（２ＤＫ　２部屋）

カフェ＆喫茶

物づくり

子育てスペース

「いぶりたすけ愛」と「ともかな」

郵便局
コンビニ
いわた内科クリニック
コープさっぽろ

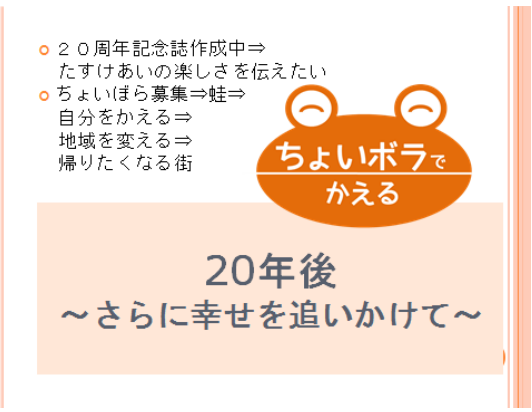
このカフェの写真は、障がい者の就労支援でパンを作っているところが、毎週金曜日にカフェを開いている様子です。いつも来ている方が、このごろ見えないので、どうしたんだろうと思っていたら、「就職することができました。」とお客さんで来てくれたりして本当に嬉しいことがあります。

これがいぶりたすけ愛とともかなの写真なんですけども、このすぐ隣に岩田内科クリニックがありまして、向かいにCOOPさっぽろという大きなスーパーもあります。近くに郵便局とコンビニもありまして、とても便利のいいところです。岩田内科のとなりには胆振幌別川があります。秋には鮭が登ってきますし、冬は白鳥が来て、夏は鹿がいっぱいいまして、10頭くらい集団でいたりすると怖くて通れなかったりするんですけども、自然も豊かですし、便利もいいところです。

これが「高齢者いきいきグループリビングたすけ愛の家」の写真です。これは室蘭のイタリア料理店に5月の誕生会にみんなで行った時の写真です。自治会費を3,000円集めて、誕生会とか紅葉狩りとかに出かけます。そういう時にどこに行こうかとミーティングで決めるのですが、この時は、住んでる方の娘さんがお子さんがイタリアに住んでいて、イタリア料理などに詳しい方が、室蘭にイタリアより美味しい店があるよという情報があり、みんなで出かけました。ほんとに大変美味い2500円のランチのコース料理だったのですが、皆さんあまりにも食欲がいいものですから、ちょっと足りないんですよね。（笑）「帰りにラーメンでも食べていきたい。」という人もいて、お皿を舐めるくらいきれいに食べたんです。その店は６５歳位の女性が２人でやっているレストランなのですけれども、大変感激して「若い方でも全部食べきれない方がいるのに、みなさん全部きれいに食べてくれた。どういうところかと思って見に来ました。」とわざわざ「いぶりたすけ愛」を訪ねて来てくれました。そして「ともかな」のワンデイシェフのコミュニティレストランなども案内しましたら、「ピザのお店を出します。」と800円でピザを焼いてくれています。「ともかな」もちょうど木曜日が空いていたものですから大変助かりました。グループリビングの生活者のおかげで本当に助かっています。

次に打合せの写真ですけれども、週に１回と書いてありますが、今は月に2、３回です。なんでもみんなで話し合いをして決めています。これは「たすけ愛の家の歌」を旭川から見学者がにいらしたので、歌を披露しているところです。生活者の９３歳の男性が５年位前でしょうか、「たすけ愛の家の歌」というのを作詞して「函館の女」のメロディーで歌っています。それがまた素晴らしくて、それを聞けば「たすけ愛の家」の様子が全部わかるという、たいへん感激する歌です。私ちょっと歌えないので、皆さん見学に来てくださったら、みなさんが喜んで歌ってくれると思うので、ぜひ北海道に歌を聞きに来てください。先日、ミーティングでこんな話がありました。98歳の女性が「もう私はあとどれだけ生きられるか分からない・・」と後ろ向きな言葉が多くなっています。当会のサロンのカラオケ、俳句には参加しているのですが「このごろ私はいつサロンだったか忘れちゃうのよ。」とおっしゃるものですから、私が「じゃあ今度から声をかけましょうか」って言いました。そしたら、それを聞いて87歳の女性が、「私たちは自立と共生の暮らしをしているんですよ。皆さん予定表を頂いているでしょう。それを見て今日は出る今日は出ないって自分で判断しなかったら、ボケてしまうわよ。」っておっしゃったんです。いくらなんでも98歳の人にはちょっと難しい、と私はその時思いました。でも次の日掲示板に予定が貼ってあるのを98歳と94歳の二人が、今日はカラオケ、明日はパソコンと一生懸命に見ているのです。仲間の一言ってすごい影響力でびっくりしました。おかげで声をかける必要はありません。

これはサロンの様子です。会員のやりたいこと教えたいことでサロンが増えて、カラオケ、薬膳料理、パソコン、絵手紙、囲碁、俳句、短歌、歌声喫茶、麻雀、書道、卓球、最近英会話教室が始まりました。（笑）グループリビングの生活者はたくさん参加しています。全く参加しないという方はいません。サロンは会場を会員さんに開放して自由に使ってもらっています。会員同士なので、みなさんがすぐに仲良く慣れるということもありますし、お互いをよくわかっていて、励まし合っているのが大変嬉しいとおもっています。また、地域からサロンに通って来る方が、グループリビングの生活者になったりしています。



これは、「ともかな」の写真です。「ともかな」にはものづくりの販売スペースがあって、そこにグループリビングがオーナーになって駄菓子屋を出しています。実は自治会費がたくさん貯まっていましたので、「ともかな」が出来る時に、駄菓子屋を出しませんかと誘いました。快くオーナーになってくれて、対話のある駄菓子屋を目指しています。近くに住む車椅子の方が店番をしてくれたりするのですが、街を歩いていると子供たちに「駄菓子屋のおばちゃん」と声をかけられるそうです。この間もあまりにも風の強い日に店番の当番の方に「来なくてもいいよ」と電話を入れたらその方が、先日学校で父兄会があり、その日に駄菓子屋にいつも来てくれているお子さんが、一緒に住んでいないお母さんが、参観日に来てくれてとても嬉しかったのでお母さんに何かプレゼントをしたいと買物に来たそうです。そういうお子さんが来るかもしれないから、私は風の強い日でも店番に行くわとおっしゃったので、驚きましたが嬉しかったです。対話のあるお店を目指しています。

これは長寿亭卆二といって、グループリビングに住む方です。９２歳の時だったので卆二なんですけども、小話が大変得意で「ともかな」の喫茶に行った時小話を披露したんですね、その喫茶店のマスターのお父さんという方が落語が得意で、あちこちで落語会を開いている方でした。一緒に落語会をやろうと誘われ、「ともかな」で一緒に落語会をしました。92歳なんですけども立て板に水で、お客さんは感激していました。今は93歳ですので卆三ですね。きっと年々名前が変わっていくんだと思います。すいませんもう時間ですね、

現在、二十周年記念誌を作成しているところです。当会も担い手の不足が課題です。チョイボラでかえる。自分が変わる、地域が変わる。帰りたくなる街をテーマにアイディアを出し合ってパンフレットと記念誌を作ろうと頑張っているところです。グループリビング「たすけ愛の家」も、みんなでもっと助け合える仕組みにしていかなければと思っているところです。

これで終わりにさせていただきます。ありがとうございます。

奈良ワークショップ　講演３　宮野　順子氏

「グループハウスさくら」
25年にわたる実践から読み取れること-

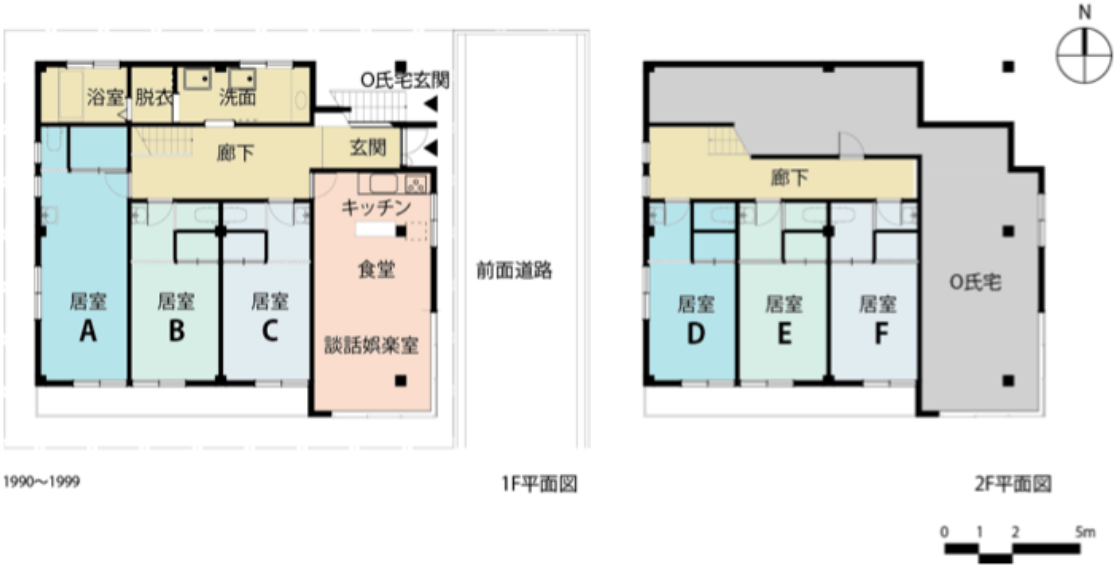
こんにちは。兵庫県福祉のまちづくり研究所の宮野と申します。座ってお話させて頂きます。私の立場の場合、研究者ということでして、実際に運営しているわけではないんですが、私のあとに喋る向平さんのコミュニティハウス法隆寺のようにいくつか研究対象とさせて頂いてまして、色んな運営者のお話を伺っております。その中でグループハウスさくら、というグループリビングを紹介させて頂きたいと思ってます。運営経歴が 25 年にもなる長い経歴のあるグループリビングです。居住者がどんどん高齢化していく様子とか、それに対処していく様子とか居住者同士の関係とか、私が確認できた範囲でご紹介させて頂けたらなと思っております。

外観はこのような感じで、埼玉県の浦和というお祭りなんかも盛んな古くからの地域に住宅としてあります。室内はこんな感じですね。食堂、キッチンとこじんまりした感じです。概要なんですけれども、1990 年、25 年近く前に開設されました。開設者は小川志津子さんという方で、県の市議会議員をやっておられます。西條さんともお知り合いだと伺っております。今は総勢 80 名の介護事業所を運営する会社の会長職をされております。始められたきっかけは、全国の高齢者施設を見て回って、自分が入りたいと思えるような施設をつくりたいということです。開設して 6 年後に厚生省の高齢者グループリビング支援モデル第一号ということで、テレビでも紹介されて有名になりました。6 人の女性の居住者で互いに支え合って共同生活をしています。

概要

- 1990年　開設
- 運営者は　浦和市市議会議員　小川志津子さん
- 厚生省「高齢者グループリビング支援モデル事業」第1号
- 互いに支えあって共同生活をする
- 6人の女性居住者
- 自立して老後を過ごしたい人のあつまり

平面図



これが平面図で一階に玄関があって、隣に小川さんの住宅が併設されています。お部屋にはトイレと洗面と物入れがついています。

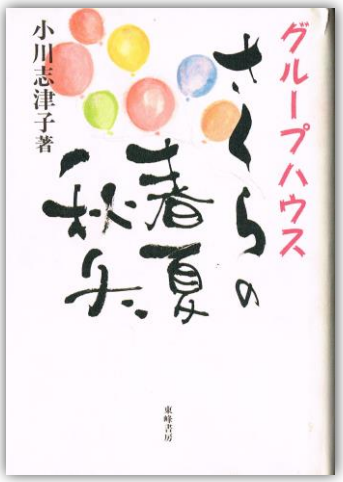
建物　運営組織　概要

所在地	埼玉県さいたま市	**構造**	**鉄骨**造 3 階建
総室数	6 室　のち 3 室	**間取り**	個室 , トイレ洗面
のべ床面積	160.37㎡	**共用面積**	66.82㎡
住居専用面積	14-19㎡のち 33㎡	**共用面積／延べ床面積**	41.6%
専用部面積合計	93,55㎡	**完成時期**	1989 年 12 月
共用空間	[屋内] 食堂・談話室 , 台所 , 浴室・脱衣室 , 洗濯室 , 玄関 , トイレ [屋外] 庭、菜園		
居住にかかる費用	家賃 5 万円　食費 4.5 万円　共益費 1.5 万円 / 月 入居一時金 300 万円　生活実態を考慮		
付帯サービス	食事 (朝夕)、見守り、緊急対応他		

面積は 2000 年当時のもの、運営者宅部分を含まず、グループハウス部分を示す。

かかる費用はひと月あたり家賃 5 万円と食費が 4．5 万円と共益費が 1.5 万円。入居一時金が 300 万円です。生活保護の人たちを入れたりもしているので、入居一時金については人によって考慮しているというお話でした。

参考にした書籍



小川志津子著
グループハウスさくらの春夏秋冬
1998.3
東峰書房

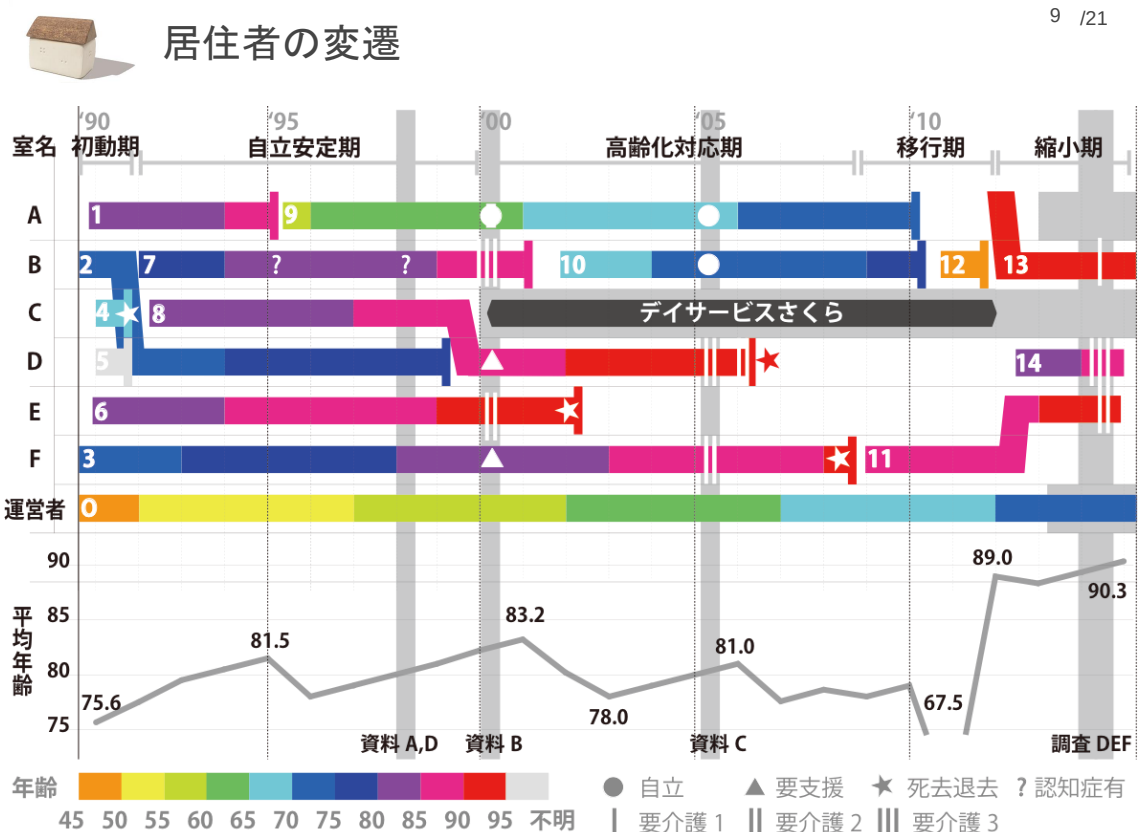
これが開設後 7 年した時に小川さんが書いた本なんです。この本の中に居住者の言葉とか出来事とかが記述されておりますので、私がお話させて頂く内容はこの本にあるお話と、ちょっと昨年度お話を伺った時の内容をもとにしています。

25 年間ってすごく長いんですけど、その中で最初お住まいだった方がどれくらいの長さ住んでいて、また、だんだん 1 年ごとに歳を取っていくわけなんですけども、皆さんが高齢化していった時っていうのはどういう状態になっていくのかな、っていうのが私の興味があったところなんです。

調査方法

No	資料名
A	小川志津子：グループハウスさくらの春夏秋冬 , 東峰書房 ,1998.3
B	らぴす舎編 : 65 歳からはどこに住む？だれと住む？ , ソレイユ出版 ,2001.10
C	村田裕子：注目！！介護も安心の高齢者グループリビングをつくろう 筒井書房,2005.12
D	堀田力のさわやか対談 , 月刊「さぁ、言おう」, 公益財団法人さわやか福祉財団 ,1998.10

No	方法	対象	実施年月	所要時間
E	半構造化面接による聞き取り調査	運営者	2014.7	
F	自由記述による居住歴記述	当時の居住者 3 人	2014.9	
G	半構造化面接による聞き取り調査	運営者	2015.3	



図表では、オレンジ色が 45 歳から始まって、高齢化が進んでいく 80 歳～85 歳が紫色、赤色が 95 歳っていうことでだいぶんお歳を召されてくるといったような感じです。最初のころは平均年齢 75.6 歳だったんですが、毎年 1 歳ずつあがっていきまして、開設 5 周年経った時には 83.2 歳までなっていました。その時までを、名前をつけていて、自立安定期と名付けています。ちょうどそのタイミングが 2000 年で、介護保険が始まったので、デイサービスを共用部の食堂と隣の部屋を 1 室つぶして、始めています。このとき平均年齢が 80～90 歳になってこられてるので、日中も対応をできる体制を取りたいということからデイサービスを始めるということなった、ということでした。

もうひとつですね、食事の準備も皆さんなかなか共同でやるのができなくなってきていたので、ひとり 60 代後半の若い居住者が入ってこられたので、その方が有償ボランティアということで朝夕の食事をつくるようになっていました。

さて、残念なことですが、グループハウスさくらは、昨年度に、縮小廃止ということが決まりました。残りの居住者はひとりです。デイサービスを始めるタイミングで会社を興しているのですが、会社の方は介護保険事業を担う形で成長してきています。娘さんが事業継承しています。グループリビングに関しては小川さんの自宅併設ということで、小川さん自身も高齢化したため、縮小するという方向で決まりました。なので、グループハウスさくらの運営期間は 25 年間で終わり、という感じです。

居住期間

- これまでの居住者は14人
- 最長18年　最短3ヶ月　平均　8.5年
- 10年以上の人は、5人
- 7-10年の人は、4人

- 安定的な居住
- 3年に1回程度は入れ替わり
- 長い人は14年同居の間柄

それで、まとめてみると、これまでの居住者が 25 年間で 14 人と、意外と少ないんですけど、最長で 18 年。最短で 3 か月でした。平均が 8.5 年なんですが、10 年以上住んでる人がそのうち 5 人いるし、7～10 年の人も 4 人ということで、結構みなさんどっぷり住まれてるということです。だから安定的な居住と言えると思いますし、今シェアハウスなんかが居住期間 2 年とか、特養グループホームでも 3，4 年っていうところを見ると結構長い間住んでもらえているのかなという感じです。生活の様子なんですが、最初のころは食事の準備もメインディッシュだけはボランティアにつくってもらって、その他のごはんとかお味噌汁とか朝ごはんとかはみんなで共同で役割分担、お風呂のお湯張りとかも共同でやっていたんですが、なかなか皆さん、年齢もあがるとヘルパーさん頼りになってる部分、それから有償ボランティアで担う部分も増えてきた、というところです。

その他に、小川さんがされていた支援というのが、見守りとか施錠とか、送迎とか緊急対応、それからミーティングとかをされていました。

14 人の居住者の方がどういう経緯で入ってきて、どういう経緯で出て行ったのかというのを見てみました。入ってきた理由はさまざまなんですが、皆さん自己決定で入って来られています。それから終の棲家になったのは 14 人中 4 人でした。他に介護度があがった人は特養とかグループホームとかで退去してます。図表で一番下に示したのが、お墓とか葬儀手配なんですが、さくらの共同墓地っていうのを決められておりまして、毎年お花見がてらお墓参りに行くことになっています。そこに入ってらっしゃる方もいるし、入る予定の方もいるし、っていうのがすごく印象的でした。

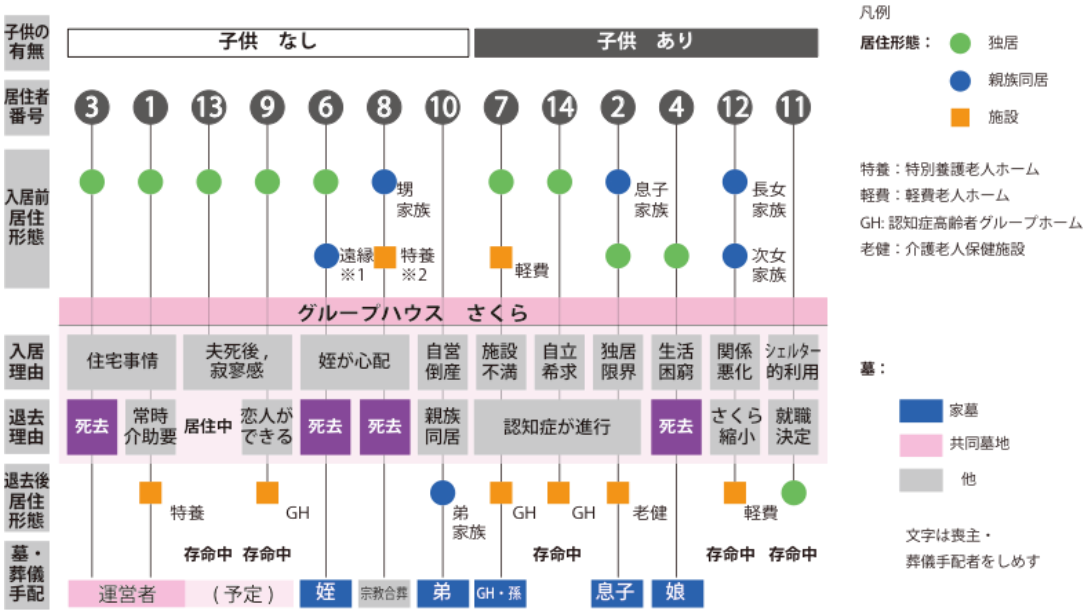
やはり夜間徘徊とかみられると、ちょっと一緒にいるのはしんどいかな、支えきれないかなということで退去しています。退去したあとも一緒に旅行に行ったり訪問しに行ったりして、入院していても退去してしまわれても、観念的な「家」として認識されている。でも介護の居住限界としては、一般家庭と同程度かなという感じです。

あとは次に居住者同士の関係をみてるんですが、お手元の資料の方にいくつかエピソードを載せています。ここに載せているのは代表的なひとつなんですが、認知症の症状が見られながらも結構みなさん役割を得て機嫌よく住まわれているっていう雰囲気が出ているかと思います。その関係というのがどういうふうになっているのかお話を聞いてきました。まずその中では、小さな集団だし、生活も重なりがあると。かつ、それまでに一人暮らしっていうのは経験してきてそれなりに寂しい思いっていうのは経験してると。そういう状況のある中で、居住者の行為っていうのは、実際に理解してお互いの得手不得手がわかるとか、言いたいようなことが言えるっていう関係であること。プラス、もめ事ですね。犬猿の仲の人もいるし、なんかちょっと気になる人もいると。だけどそれをやっていく中で、お互い緊張感や闘争心を持つし、うまくいけば助け合うっていうこともするし、それでお

互いに配慮するとか我慢するとか、今度は言わないようにしようとか、そしたら我慢とかもするようになると。だめな場合は退去してるんですけども、そうやってわいわいしている中で、料理が上手くなったとか、新しい知識を得たとか、っていう話と、あとは、お料理上手ねって褒められた話とか、料理上手じゃなくてもいいねん、っていう認められるっていうような話もあります。それから、「ひとりではできない生活の楽しみ」ですね。お相撲をみんなで観戦するとか、すいかを食べるとか・・・喧嘩も一人じゃできないので、そういう楽しみができるのかなと。それから生活リズムの維持ということで・・・生まれてくる感情って言うのは、ユーザーエクスペリエンスというか居住者体験として、もめ事をしてそれで理解が深まったというか仲間意識は高まるというところで、共同体感覚っていうのもできてくるのかなというのをみてきました。

入居前と退去後

12 /21



入居前と退去後

- すべて自己決定にて入居
- 終の住処となったのは4人
- 要介護状態は転居（老健、グループホームなど）
- 退去後も交流　旅行、訪問など
- 共同墓の存在　毎年の墓参り

→ 居住限界は一般家庭と同じ
→ 観念的な「家」

居住者どうしの関係

居住者７著

六人だけの生活は、とても家庭的ないい雰囲気です。
私が気分が良い時、鯵の干物を作ったり、
サバのでんぶやイワシのつみれ汁を作ると
みんながおいしいおいしいといってくれ、
お代わりをしてくれます。
うれしいことです

居住者どうしの関係

15 /21

状況	小集団	同性、家族とは異なる関係
	生活の重なり	日常会話など
	被支援の必要性	独居による寂寥感の経験
居住者の行為	居住者への理解	言いたいことが言える、得手不得手
	揉め事・衝突	犬猿の仲、行動が気になる
居住者の反応	緊張感・競争心	張り合う、きちんとしなくては
	相互扶助	励まし、認知症の支援、役割認識
	協調性	配慮、我慢する、秩序と和
	退去	退去する
効果 生活の質	知的発達	料理が上達、新しい知識の獲得
	自尊感情・被受容感	褒められる、それでいい
	ひとりではできない生活の楽しみ	相撲観戦、食事を振る舞う、晩酌話をしながら食事をする、旅行
	生活リズムの維持	早起き、気持ちがしゃんとする
感情	居住者体験	満足・うれしい
	共同体感覚	助け合える仲間

ただ、そんなうまくいかんよ、っていう話も言われると思うんですけども、ただそれを小川さん、さくらの運営者はどういうふうにして実現しているのかっていうのを読み解きたいな、と思いました。ここに示したのは、居住者と運営者の関係を示すエピソードです。なにかと言うと、小川さんは旅行に行きたくて、1ヵ月くらい滞在したいと言うたんです。そしたらみんな、「いやや、長い。」、「飽きてくる。」とか言い始めて、結局2，3日で戻ってきて、締めくくりとしては「私の独りよがりだったようです。」ということで締めくくられてるんです。

居住者と運営者の関係

私としては、今年の夏は一夏ここを拠点にして、みんなで楽しく過ごしたい、そんなことも考えていたのです。
「一ヶ月もいると飽きてくる」など意見が続出 です。結局のところ、安心できる自分の家へ早く帰りたいということでした。暑くわずらわしい都会を離れ、こんなに静かで涼しいところで夏休みを過ごせるなん て、なんとうれしいことでしょう、みんなもきっと喜んでくれるだろうというのは、私だけのひとりよがりだったようです。

そういうエピソードいくつか見てみると、やはり生活の重なりがあるというのは状況として一緒で、あとは問題が発生する、起こるっていう話と、経営者は赤字を出さないようにしないといけないっていう「経営的整合性」、それから居住者に対する責任とか・・・それから、さくらを続けていかなければならないので、無理しない、ということで、運営者の小川さんは何をしているかっていうと、まずは理解するとか、支援するとかっていう話と、イベントを提案したりとか、居住者間の関係の促進・調整っていうことでミーティングしたりとかしてます。それに対して居住者はまた反応をしてるんです。満足したり、拒否したり、しょうがないなと思って納得したり受け入れたり・・・それで満足、不満がでてきます。それをみて小川さんはその意見を尊重すると・・・尊重する場合もあるし、「もうそれはだめ。」っていうことで怒る場合もあるし、あるいは知らんでって言って関わらない場合もあるんです。そういうのをやっていった中で、お互い対等な関係にしようと思うと、「じゃあ、私は洋服縫ってあげるよ。」とか、「着物の衿付けしてあげるよ。」とか、居住者さんも小川さんにしてあげれることはしてあげている。でも、やはり子供とお母さんみたいな関係もできています。居住者の中での運営者の役割をみると、自分たちで勝手に主体的に動く居住者を見守る役割と、一方で居住者の中で中心的な役割も担うという両面の役割が見えてきました。

居住者と運営者の関係

状況	生活の重なり	一緒に生活している
	問題発生・状況の変化	問題がおこる
	経営的整合性	経営的に赤字を出さないように
	居住者に対する責任	居住者に何かあっては大変
	持続性の確保	続かないので無理をしない
運営者の行為	居住者への理解	人となりを理解する
	居住者への支援	介助、送迎、看取り、後見人
	運営者が提案する	設備の更新、イベントの企画
	居住者間の交流促進・調整	ミーティングの実施、食事共有 トラブル調整
居住者の反応	拒否・否定 / 納得・受容	
	満足 / 不満	
運営者の対応	居住者の尊重	意見を尊重する
	居住者への注意	怒る！
	積極的な関与の否定	関わらない
形成される関係	直接的関係	対等な関係
		情緒的不対等な関係
	居住者間の役割	主体的な居住者
		居住者間の中心的役割

運営者もしてもらう		
亡夫、母親、子供みたい		
自分たちで決める		
居住者間の心棒		

これらが今まで書籍とかヒアリングとかで見てきたもので、以上です。長期間の安定した居住が達成していて、18 年も住んでいる人がいました。入院していても帰るべき場所と捉えてました。実際の運営では居住者のできることは、できるだけ小さくして、分担するようにしてたんですが、加齢によって協働ができない部分もありました。それに対して状況対応的な環境整備ということでデイサービスをやったりとか、有償支援の居住者を入れたりというような感じでした。

またグループハウスさくらがノウハウとして何か得れないかということを考えたんですが、その中で出たのは、やはり居住者の意見を尊重するということ。自分で考えてもいいんだ、となると居住者も責任が伴うので状況も判断しないといけなくなるし、そして自分たちがしていくんだという意識が育てば、小川さんが言うように、「私はなにもしてませんよ。朝顔出して、あと『なんかある？』聞くだけですから」というように回っていくようになるんですね。そうすると運営者の仕事が減るというようになってくる・・・だから支援し過ぎないこと。それでもうひとつは居住者たちを仲間にするということ。何の縁もゆかりもなかった人たちを、ひとつ屋根の下でまとめあげることが、結果的に運営者の労力も減るという方向にいっていることもあると。それで第三者の目として存在しているだけで介入し過ぎないということがありました。それであとはライフコースを見せるということですね。いきなりお墓までということは無理かもしれないですけども、入院しても帰ってきたいと思える場所になっているというようなところで、安定して長いこと住むっていうように肚が座るので、それなりの我慢も協調性も出てくるのかなというふうに思いました。それでここでお話したことは本にも取り上げられるような良い面ばっかりで、実際の暮らしはそんなことだけではないと思うんですが、実際に 14 人のおばあちゃんたちが 10 年以上も暮らしてきたという事実がある意味それを裏付けるのかもしれません。なので今日は運営者の方がとてもいらっしゃっているのであとでたくさんお話を聞けたらと思っています。ありがとうございました。

18 /21

「グループハウスさくら」25年間

長期間の安定した居住の実現

- 最長18年　平均8.5年
- 観念的な「家」としての機能

業務の細分化による協働・分担

- 居住者の加齢により協働行為は減少

状況対応的な居住環境整備

- デイサービスの開始
- 支援側の居住者の存在

持続性の限界

- 1代限りの個人経営

19 /21

運営者がしていたこと

居住者たちの主体的にする

- 意見の尊重 -自分で決めていい
- 支援しすぎない！？

居住者たちを「仲間」にする

- 交流機会をつくる　イベント、食事
- 調整　第三者の眼の存在、関わりすぎない

ライフコースを見せる

- 墓、看取り、訪問後の交流
- 終の住処ではなく観念的な「家」

奈良ワークショップ　講演４　向平すすむ氏

私たち「超家族」

コミュニティーハウス法隆寺の 11 年

「コミュニティーハウス法隆寺」は、法隆寺がある町に開設した、ということで、命名したのですが、このネーミングにくわえ、入居者が株式会社をつくって自ら運営するというかたちは、これまで全国でただ一つであることで、「法隆寺方式」と呼ばれるくらい、知られてきました。この家をどうしてつくったのか、どんな暮らしをしているのか、話したいと思います。

可能な限り自立して生きる終の住処

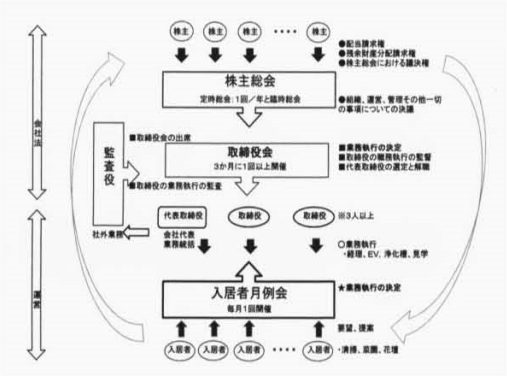
私が 60 歳で定年になったとき、大阪のボランティア団体「ナルク」の会長から組織の会報発刊の編集長を頼まれました。ナルクは 50 歳以上、夫婦単位の入会を求めるシニアの団体で、日本のボランティア元年と言われた阪神大震災の前年に誕生、救援ボランティアが落ち着いた後は、「元気な中高年が困っている高齢者を助ける」「自分のできることをする」をモットーに活動しました。なにせ鉛筆しか持ったことがない仕事をしてきましたが、「これだったら、ボランティアできる」と引き受けました。

記者、編集者、コンピューター編集の制作者などの OB にボランティアを呼びかけてタブロイド判４㌻の新聞を 98 年 6 月から毎月発行し、やがて組織は会員２万人、全国に３０余りの支部が発足するまでになりました。

紙面の方も充実して 50 号からは 8㌻・カラー刷りのシニア情報紙へ発展的転換をすることになった 2002 年夏のことです。ナルク本部が会員 1200 人から回収したアンケート「あなたにとっての老後の課題とは」で、４人のうち３人までが「最期の住まい・共生」に関心を持っていることが話題となって広まり、ちょっとした「事件」が持ち上がりました。　　奈良市の女性会員から共同住宅用の敷地を 50 年の定期借地で提供してもよい、との話が伝えられたのです。それも、２路線が交錯する私鉄駅の直近で区画整理事業が進み、デパートへ徒歩 7 分、当時の奈良県内でも一番便利で好環境の超一等地だったのです。

会報の新聞を読んでくれている会員のほとんどは、元サラリーマン。仮に志高い有志が、寄り集って「最期の住まい」をつくるとしても、土地も建築費も持出しや借金でまかなうわけにはとてもいかない。しかし、土地の部分は５０年間、地代を払うだけで OK という好条件は見逃せない。老後を目前に超一等地に住み替えたい人もいるだろうし、まずは仲間集めを考えてもいいかも…と私までもが乗ってしまったのが運の尽きだったのかもしれません。これが今日に至る始まりだったんです。

新情報紙の一面トップに「安住の館　ともに探ろう」「暮らしと住まい研究会始動」と、自ら筆を執って「研究会」の参加者を募ったところ、来ました、近畿各地から６０人も来ました。「老いとはなにか」「６０歳から必要になるお金と備え」「介護と住宅」「豊かな老後の営み」。次々、専門家を招いて勉強会を開きながら考えました。友人の建築家２人にも頼んで家づくりの基本設計案を練ってもらいました。



どんな家がよいか、と参加者の意見も聞きました。みんな、ボランティアやっていて経験しているんですけど、老人施設へ行くと、住まいの主人公であるはずのおじいさま、おばあさまたちは決まって言います。ボランティアの私たちにまで「お世話になります」…と。自分の残り人生を過ごしている場所で、あれだけは言いたくない。お世話になります、と言いながら最期を迎えたくない、と声があがりました。もう一つ「終の住処を作りたい」と言うと、「もう、最期の御迎えの準備ですか」と誤解されること。違います。最期まで元気に暮らせる住処をつくりたいということなんです。

で、これを実現するには、どんな仕組みの組織が必要か。それが、簡単じゃない。だれかにつくってもらって、その家に入れてもらうのではなくて、自分たちで家を作って、そこに自分たちが入るという前例のないテーマ。「50 年という長期間、貸してくれる土地がある」以外に何一つ方向が見えていない。経験も実績もない私たちが、未知の答えを求めて試行錯誤の末に、知人の税理士に相談し、解答をもらいました。イロハのイから始められる、わかりやすくて取り組みやすいのは「株式会社である」ということ。目から鱗でした。

まずは、株主集めを始めました。本当に住まいたい人が株主になるわけです。60 人で始まった研究会は議論が深まるにつれ、逆に人影が引いていきました。そして、参加者の意思確認の段階になり、気がついたら「あれっ、５人」になってました。（会場の皆さんは）笑っておられますけど、これって大変なことなんです。つまり、５家族が、自分でお金を出して、株主になって、会社の運営に参加し、その会社が発注して家をつくり、ついには、仲間とそこに住む、という意思の表明なんです。最終的に５夫婦と３単身が集まり、私は、快哉をあげました。

これからは、会社を構成する株式数つまり総出資額をどれだけにするか、みんなで考えました。繰り返しますが、一人ひとりが最後まで自立し、上手に共生し合う仲間同士です。夫婦も最後はどちらか一人になりますから、居住者各人すべてが均等に出資して株主になることとし、その１人当たり出資額は、７５０万円と決めました。一人が住むのに最低限必要な広さを 28 ㎡とし、その建設費プラス共用部、その他経費を含めたオール費用を１人分として算出したものです。夫婦用では、広さ 56 ㎡分、つまり出資額は１５００万円となります。

しかし、現実には、「もうちょっと広く欲しい」「自室のデザイン・追加設備は自分で考え、充実したい」の声が出て、「７５０万円＋α」で自己負担分を加えました。結果的に、資本金の１・５倍相当のお金を出し合ってハウスが建つことになりました。

計画は軌道に乗って第１次の出資金振り込みも順調に進み、具体的な設計図案の検討が始まった頃、魔が差しました。地主の女性から「土地の提供を白紙撤回したい」と、突然の申し入れです。理由は述べられず、頭が真っ白になりました。「株式会社」による前例のない手法を危ぶんだ

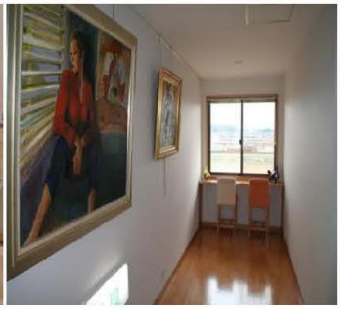
か、横やりが入ったかです。しかし、株主たちは動揺するどころか、「出資して会社まで作ったのに止めることはない。新しい土地を探そう」の答えを出しました。

そうなんです。「１億円近い出資をし合って共同の家をつくろうとしている」の話は金融機関などにも伝わり、注目され出していました。中でも、私たちの住まいへの決意と結束の力を評価していたのが、奈良県農業協同組合の資産管理課長でした。「私にまかせて」と、彼が紹介してくれたのが、法隆寺があることで有名な斑鳩町の、JA が開発した農住団地の一角、私たちが現在住んでいる場所です。

朝日と夕陽と古代条里制の里

それは、素敵です。ハウスの南側は 180 度見渡す大空間。東からこんな朝日が上がります。奈良、平安の頃の絵にはよく霞が描かれますが、霞は、盆地特有の風景の一部であることが、よくわかります。そして西側、二上山という二つの頂上があるこの山に落ちる夕陽は恍惚となるほどに美しい。この山麓で少年時代を過ごした僧が、落日の向こうに浄土があるに違いない、と後に浄土宗を開きました。浄土宗から浄土真宗へ深めた親鸞も若い頃にこの夕陽と法隆寺に出会うために訪れています。東から西へ太陽が渡るその下に広がる田園は、奈良時代の区画制度・条里制の名残を留める風景です。まさに歴史的景観の地に私たちは「終の棲家」をつくったのです。

田園とは反対の北側は道路に面し、ハウスの表になります。日陰になりますが、表側花壇は珍しい花をできるだけ植えて手入れしてきました。スイスに行ったとき、民家の表側は公共の花壇として通行の市民に楽しんでもらうために工夫され、裏の花壇は自分の好きな趣味用にする、ことを知って習ったものです。実際に表の花たちが、地域の人たちとの立ち話のきっかけになり、様々なお付き合いが生まれました。



玄関は、全面ガラス張りで外からも内からもすべて見通せます。訪問者の用件によっては、内側の住人が承知しない限りドアを開閉されないので、押し売りなどは絶対と言っていいほど来ません。近隣の戸建てで被害が続いた泥棒さんもありません。共住の目があるとともに様々なセキュリティーやガードのシステムも整えています。

２階建てですが、階段とは別に体が不自由になった時のため、車いすで乗降できる本格的なエレベーターと専用トイレもあります。廊下などの壁面は、大きな絵を描いた人やコレクターの作品、趣味の写真などが飾られています。

個室は、住まい手の意向に沿って設計され、８つの個室はすべて異なり、同じ部屋はありません。写真は、そのひとつの風景です

株式会社による「運営」の強みと公平・合理性

さて、株式会社にした結果ですが、ここに住む限りすべて均等、平等。同時に同じ義務、責任を負う。全員が株主であり、オーナーですから発言に制限はありません。議論が進まず長くなることもあれば、30 分で終わるときもあります。株主としての位置からみれば、総会は総意の決定の場であり、執行部としての取締役会には、各家の、夫であろうと妻であろうと関係なしにどちらかが役員に選ばれます。代表取締役も現在３人目です。

これを入居者の位置からみれば、毎月一回開く月例会の議事進行、記録役は全員交代で務めながら日常生活の細やかなことまで話し合います。「株式会社」という組織は、会社法に沿って運営しますので、加えて当番や分担といった役割を必要としません。株主総会および月例会の話し合いですべてを決定し、実行します。

この 10 年余り、私たちは地域というコミュニティーとどう関わってきたか、話しましょう。

北側花壇が通りがかりの人との会話を生んだ話をしましたが、西端のこの巨大ダリヤも大きな役割をしてくれました。６年程前、京都の植物園で高さ４㍍もあるこのダリアの見事さを見て、種イモを手に入れ植えました。毎年 11 月、花が咲き出すと、写真を撮る人、花見をするグループもあって、地域の評判になりました。求めに応じて幹片から芽出しした苗ポットを、毎年用意して配ったことで随分たくさんの人に知り合えました。

こうしたご縁がきっかけで、近くの田んぼを借りてジャガイモ作りが始まり、ついには、ハウスの敷地を借りている地主さんの自家菜園 70 坪をそっくり耕すまでになりました。アンズの手入れをしていて脚立から落下、頭を打って入院した地主さんに代

わっての耕作がきっかけですが、地主さん夫婦と私たち有志の計３家庭分の野菜作りは、結構大変。栽培法の勉強と汗を流しての作業の連続ですが、収穫以上の喜びがあることを知りました。

生きがいの発見～小さな農と食の愉しみ

３年前から、この喜びを有志の２家族がかたちを変えて表現してきました。丹念に育てた野菜たちのおいしさを引き出す調理で、地域や近畿に住む知人、友人たちに試食してもらうサロン「小さな農と食の愉しみ」を毎月一回開いています。私たちのハウスの様子と耕している菜園を見てもらい、美しい野菜たちの味の豊かさを確かめていただきます。私たちが見つけた「新しい暮らし方」を知ってもらう会でもあります。

びっくりする事が起こりました。第１回のサロンに参加した大阪の団塊女性２人が、川崎市在住の友人を誘って丁度空いていた夫婦用の個室の入居権を獲得してしまったのです。３人とも家族はいるのですが、割り勘で空き室の株式を買って、「ときどき斑鳩・農ある暮らし」をスタートさせたのです。今、流行のシェアハウスを自分たちで実現したのです。もちろん、私たちは地域の知り合いに頼んで野菜畑 150 ㎡を確保し、ここで彼女たちは、ジャガイモ、サツマイモ、大豆、ニンニク、玉ねぎ、実エンドウといった保存型の野菜をそれは楽しそうに育てています。もちろん、サロンの運営にも加わりました。

もうひとつ。彼女たちがこのハウスに現れたころ、入れ替わるように 89 歳のおばあちゃんが旅立たれました。朝、起きて、床暖房とやかんが載った IH のボタンを ON にしたあと、トイレに座ったままの姿で逝ってしまわれたのです。埼玉からここに移り住んで 11 年、楽しく過ごされての大往生でした。ハウス近くの老婦人のお世話で地域のお寺の住職による葬儀が、おばあちゃんの部屋で営まれ、お見送りには町内の人たちが並びました。ハウスがこの地にしっかり根を下ろしたことを示した風景でもありました。

人が自立して健康で最期まで生きるには何がいいか。聖徳太子は、なぜ飛鳥の都から離れてこの地斑鳩に、法隆寺に拠点をつくり、「和」を説かれたのでしょうか。私たちは、「コミュニティーハウス法隆寺」の名の通りに、この地の豊かな環境と歴史から学びながら豊かな暮らしを育んでいきたい。そう、思っています。　（完）

東広島ワークショップ　講演１　羽田冨美江氏

地域と繋ぐさくらホームの取り組み

～暮らしに豊さを～

私は広島県、福山市。福山って分かりますかね。福山大学から来て下さったんですけど。どっちかというと岡山よりのところに鞆の浦のニュー福山というところがあって、そこから車で２０分ぐらい行ったところに鞆の浦っていうまちがあります。これは・・・流星ワゴン見られました？福山じゃない人が流星ワゴンっていうテレビドラマが日曜日にあったんですけど、凄い視聴率が悪かったらしくて、あとは、崖の上のポニョも鞆の浦が舞台です。で、最近あった映画のウルヴァリンも鞆の浦が舞台です。

さくらホーム・おおの家

居宅介護支援事業
通所介護
　　定員：9名
小規模多機能型居宅介護
　　定員：25名
総菜屋
グループリビング
　　定員：4名

鞆の浦・さくらホーム

居宅介護支援事業
通所介護
　　定員：15名
小規模多機能型居宅介護
　Ａ　定員：12名　Ｂ　定員：12名
　Ｃ　定員：25名
グループホーム
　　定員：9名

そういう小さなまちで、小規模多機能とか、グループホーム、小規模なデイサービスをしているんですが、もうひとつずっとしていく中で、兵庫県、私は実家が兵庫県の相生市というところなんですが、そこで母が一人暮らしをしていて倒れて、そしてそこの施設で母を看ていきたいと思って、ひとつ小規模多機能を立ち上げまして、それでその小規模多機能の横にちょっと、グループリビングというほどではないんですが、４人だけが一緒に

暮らして頂いてる空き家を再生した建物があって、本当にグループリビングの参考には全然ならないんですが、そのようなものがあります。

おおの家と書いていますが、兵庫県の施設です。居宅介護と、通所介護と、それから小規模多機能の２５名。それから前の方で総菜屋をしているんですが、総菜屋とグループリビングというか、高齢者住宅というか、４名の共同生活をするものをつくっています。

もうひとつ、鞆の浦の方に居宅介護と、通所介護と、４００ｍ以内にひとつずつ小規模多機能をつくっています。だから徒歩でなんかあったら駆け込めるように、３つの小規模多機能とグループホームをしています。

さくらホームというのは、立ち上げた経緯も、どちらかと言えば、そのグループホームをしてみたいとか、介護施設をしてみたいと思って立ち上げたのではなくて、偽善者みたいですけど、このまちに暮らしているお年寄りの方が「あっ、ここのまちで住めていてよかった」と思えるまちが、まちづくりになにか自分が貢献できたらなという思いでつくったので・・・

さくらホームの取り組み

①施設を地域化する

②利用者さんを地域化する

③職員が地域化する

④地域での看取りを支える

施設の理念は地域と結ぶ、家族と結ぶということですし、さくらホームが取り組んでいるのは施設を地域化する、利用者さんを地域化する、職員が地域化する、地域での看取りをしっかり支えていく、この４つを取り組んでいます。施設を地域化するっていうのはどういうことかなって思われると思うんですけど、施設に本当に色んな人が出入りして頂くっていうことがまずひとつあるし、もう気軽にうちの中で同窓会があったり、飲み会があったり、地域の人に気軽に使って頂くし、４００ｍ以内に作っているっていうのは、徒歩圏域につくっているっていうのは、なにかあったら飛んで来て頂く、相談に来て頂く、っていうような感じでしているので、小規模多機能の鞆の浦のスタッフは朝４軒、全然うちを利用している人じゃないけれど、新聞がちゃんと抜けているかどうか見廻ったり、それからご近所で夫婦喧嘩があったら近所の人が連れて来てるんですよね、奥さんを、「今日だけ泊めて」みたいな・・・

なんか「えーー」って思うときもあるんですけど、なんか喧嘩が激しいような夫婦の時は来られたり、、、なんかそういう風に気楽に使って頂きたいな、と思っているということと、利用者さんを地域化するということは、利用者さんはたとえグループホームにいても、もちろんグループリビングみたいなところにいても、地域住民として暮らして頂く。地域住民の一人として暮らして頂くということを考えて、ケアプランとかで交流しています。そして職員が地域化するっていうのは、これは本当にうちの真髄というか、これをしないと、本当に施設を地域化したり利用者さんを地域化したりできない。職員がしっかり地域の人と関わっていく、ということを大事にしています。例えば、お祭りに、その準備から入っ

たりとか、防災訓練とかあったら勿論お手伝いに入るとか、それから訪問に行ったときは必ず近所の人と挨拶するとか、地域の人としっかり関係性を持つということを大事にしています。あと、地域での看取りですが、実は今年はそうでもなかったんですけど、去年は在宅での看取り、独居老人がそのうちの７割ですが、在宅での看取りを２４、５名したんですね。今年は少なくて、でも 10 名ぐらいはいました。10 名ぐらいのうち９名が独居での看取りをできました。

今日のお話しさせていただくこと

1）グループリビングの地域と繋ぐ取組み
2）小規模多機能居宅介護　事例を通して
3）まちづくり塾の取り組み

今日お話していく内容は、本当に皆様にお役に立てるお話しができるかどうかは、あんまりグループリビングとしてそんなに動いていないので、兵庫県の方にあるグループリビングで地域を繋ぐ取り組みと、小規模多機能の利用者さんの事例をひとつと、あとまちづくり塾っていうこの夏に３ヶ月間地域の人と繋がってうちの施設で実習したり、空き家再生を地域の人と一緒にしたり、そういうまちづくり塾をしました。そのことを少しお話させて頂きたいと思います。

1）グループリビングの取り組み

入居者さん野菜の販売

グループリビングの庭で
地域のいきいきサロンを

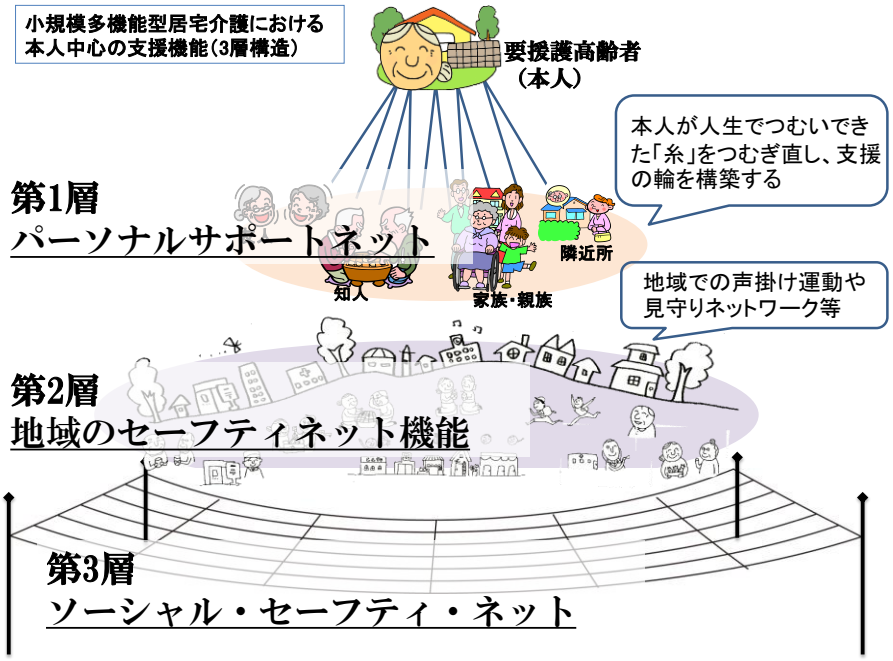
グループリビングの取り組みですが、これはグループリビングに入居されている人が、目礼市っていうのをしているんですが、野菜を売ってくれているんですね。その野菜を売るのでも本当に一人暮らしの人が周りに多いので、バナナも一房から売ってるし、野菜はね、この場所から車で１５分くらい行ったところの農家の人たちの協同で作っている野菜を一人分くらいにして売っています。これはね、月に１回～2 回、毎週金曜日に売るんですね。たとえば仏壇に置く花をつくったり・・・ただ気が向かないとしないので月に４回の時もあれば月に 2 回の時のあるので、野菜の販売は「いきいきサロン」と、この日はうちで「いきいきサロン」をしてもらってて、それでその時に横で野菜を売っているんですが、なんで野菜売りをしたかっていうのは、一緒に入居者さんのひとりの人とこのまちに何が望まれているのかということをずっとヒアリングしていきました。そしたら、人口減少が激しいまちなのでスーパーがなくなり、近くにスーパーも八百屋も何もない状況なんです。販売には車が一周間に 2 回、バスみたいなものが来るんですが、果物や生野菜を買うのが困るっていう意見が多かったので、「じゃあ野菜を売ろうか」ということで野菜を売るようにしています。ただこの人は入られた当初は少し認知症があったのですが、もう今ではしっかり計算が出来るようになり、もう大丈夫です。なので買い物市がほぼ自立する形になったので嬉しいことではありますけど、収入としては減りましたね。

あとはこのグループリビング、「もくれんの家」と言って裏がグループリビングなんですが、そこの庭で月に一回、地域の人と協同で「いきいきサロン」をしています。地域の人が大体、包括（地域包括支援センター）と社協（社会福祉協議会）の人が来ていきいきサロンをしてくれて、その時にこの写真の前の方にいるのが、うちの小規模多機能の利用者さんたちがいるんですけど、普段は地域の人たちが来てここで毎月一回サロンをしています。そしてこの横の方で、映っていないのですが、洋服とか雑貨とか、よく車で来て売って下さる人がいらっしゃっています。また、介護をしてくれる包括の人が来てくれているので、ちょっと話し相手になって帰ってくださいます。

2）小規模多機能の事例

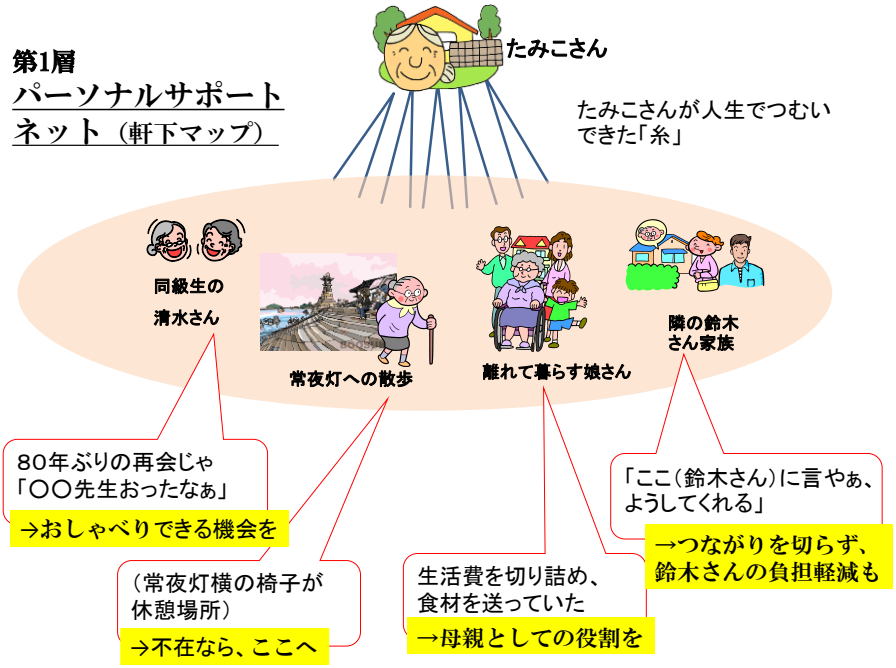
たみこさん（仮名）
98歳　女性
独居
要介護1
アルツハイマー型認知症
（HDS-R14点）
難聴
生活保護世帯

認知症高齢者の日常生活自立度Ⅱａ
障害高齢者の日常生活自立度　A2

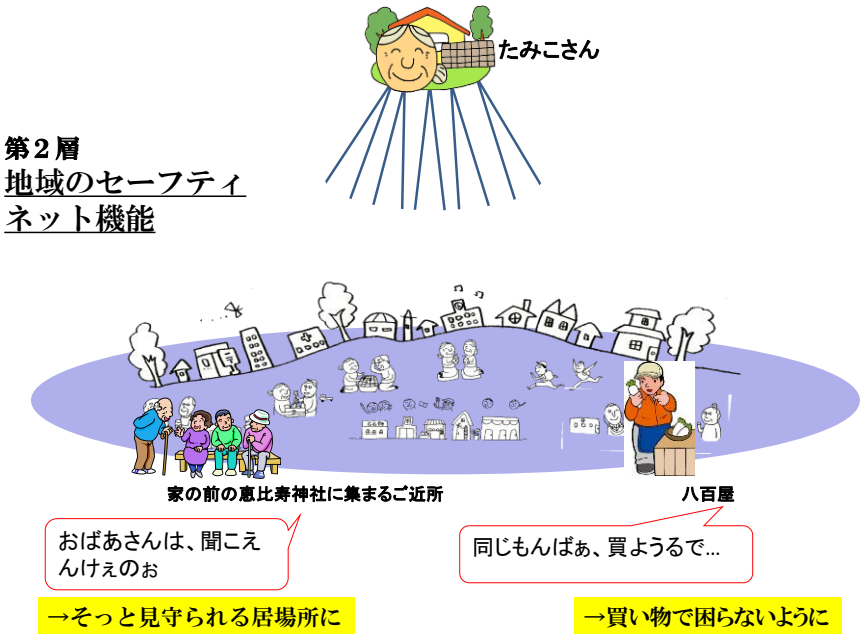


次にこれは、広島県鞆の浦の、小規模多機能のタミコさんの事例です。９８歳の女性で、要介護度１のこの方です（写真を指しながら）。この横にいるのが子供で、スタッフがいつも子供を連れて仕事に来るので、このタミコさんは子供が大好きなんですね、大好きなのでタミコさんがいる日は子供を連れてきたり、幼稚園に行ったりしています。そしてタミ

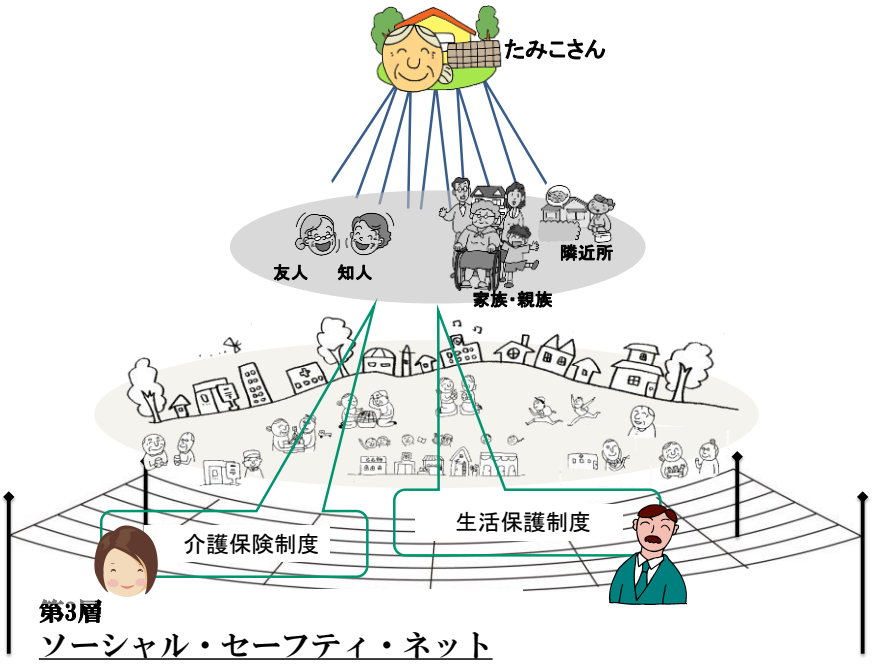
コさんを支えるのが小規模多機能の三層構造になりまして、第一層がパーソナルサポート、第二層がセーフティネットサポート、ソーシャルサポートです。



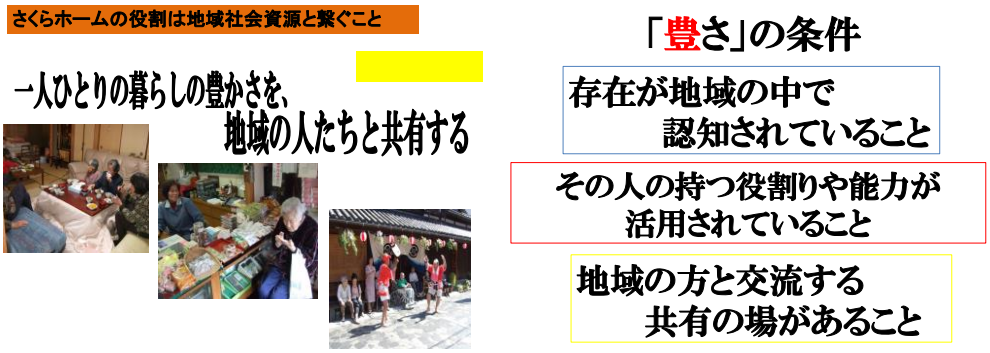
第一層で大事にしていることは、タミコさんは同級生で清水さんというおばあさんがいるのですが、通ってくる時はその清水さんと一緒になるように組んでいます。タミコさんは鞆の浦に常夜灯という場所があるのですが、そこへ行くのが大好きで、タミコさんを訪問していなければ、常夜灯に行って座ってて、ご近所の人やそこの常夜灯に集まる人と、話すという程でもないですが、大体その常夜灯にいます。タミコさんはそこの常夜灯と、もう１個家をちょっと出たところに溜まり場みたいなところがあって、いる場所が大体決まっていて自由に動いています。それから娘さんが大阪にいらっしゃるんですが、タミコさんは生活保護で生活されているんですが、お金はいつもなくて（けれど、）娘さんに仕送りしている。（けれでも）この娘さんはタミコさんのところに行くときはそのお金を使ってタクシーで家に乗り付けるという・・・私はなんかおかしいなと思うんですけど、これがタミコさんの幸せなんですね。もう亡くなられてしまったんですけど、2 年ぐらい前、タミコさんは娘さんが大阪にいらっしゃるんですけど、北新地のキャバレーで働いてらして、だからタミコさんのお金を取る度に毛皮のコートやヒールの靴をくれるんです。タミコさんは歩行器を使ってやっと歩くのに、正月の日、私が自転車で見廻っていたら、毛皮のコートを着て前につんのめりそうなおばあさんが歩いていて、大丈夫かなと思っていたらタミコさんだったんです。私はこのタミコさんがヒールの靴を履けるなんて想像もしてなかったのに、ヒールの靴を履いて、「娘がくれた」って自慢だったんですね。そして私も自転車を置いて家まで一緒に歩いたんですけど、やはり自慢するんです、「娘が送ってくれた」ってね。それを近所の人に見せ回りたかったのかなって思うんです。このように、タミコさんは娘さんが生き甲斐ですし、娘さんにそうしたいと思っている。だから私たちにうちの食費代払わないんですけど、これがタミコさんらしさなのかなと思ってそれは大事にしたいなと思ってます。そしてお隣の鈴木さんという方がいつも見守りをしてくれていて、あまり頼みすぎると鈴木さんが逃げてしまうので、適度に。スタッフが、これぐらいなら頼んでもいいだろう、と調整しながらやっているタミコさんです。



そしてその次に第二層は、タミコさんは、常夜灯に行くのも好きだし、家の近くにある恵比寿神社の前にいて、そんなにみんなと話しができる人ではないので、そこに自分も仲間として座っとくことが好きなので、ここでよく座っていたら、地域の人がなんとなく見守っていて下さっているし、なかなか朝出て来なかったら、うちに「タミコばあさん全然見んけど、ちょっと覗きに行ってくれ」みたいな電話があったりします。それから八百屋さんは、ずっと同じものを買っていたら、うちの施設に連絡をくれる。お金を払わずに帰ることもあって、それはそれでちゃんと付けてくれていて、うちのスタッフに言ってくれるので、この八百屋さんで気持ちのいい様に買い物ができるように八百屋さんと連携を取りながら、また、タミコさんが自由にまちの中で暮らせるようにと思ってやっております。なので、タミコさんのソーシャル・セーフティ・ネットは、こういうことです。



タミコさん、最後、看取りの時期が来た時、看取りの時は、娘さんが帰って来て下さったのですが、こんな風に訪問を組んでいきました。訪問を組んで、水分補給やもちろん寝返りや食事のこともして、また往診を組んで一日大体５回行きましたけど、対応としては２４時間、医療ときちっと連携できる、そして主治医と看護師がいつでも訪問できるような体制を取りました。うちでは、看取りの時、このチームで行こうっていうようにチームを作るんですね。もし看取りの時に色んな人が関わったら本当にしんどいので、チームを作って、この看護師さんも２人ぐらい決めていて、その人たちが訪問できる体制を作る。それから、この時は娘さんがいらっしゃったんですけど、この娘さんはじーっとしていられる人ではなかったので、長時間、娘さんのいない時は２、３時間いるように体制を取って、娘さんがいない場合にはスタッフが泊まるような体制を組んでいました。そんな風にして最後の在宅での看取りを行いました。



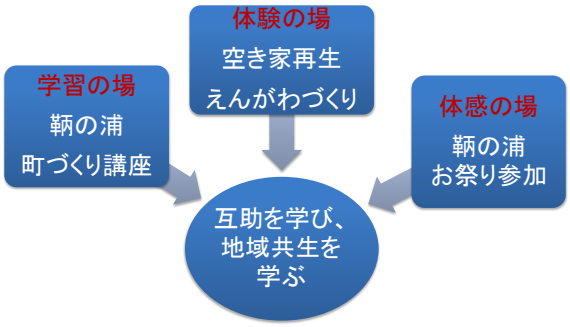
さくらほーむの役割は地域の社会資源と繋ぐことで、一人暮らしの方々の豊かさを地域の人たちと共有していきたいと思っています。

こっちの写真の足を組んでいるのはタミコさんなんですけど、これは小規模多機能でのお昼ご飯の風景です。タミコさんは行きたいところが本当に何カ所もあって、ここのお茶屋

さんも一日 2 回ぐらい行かれていました。そこのお茶屋さんの人と色んな話をして帰るのが好きで、本当に自由にまちの中を歩く、っていうのを支えたいと思っていました。

できるだけ豊かに暮らしていきたいところですが、その「豊か」ってなんだろうと思いまして、これは私の思う「豊か」であって、これは定義でもなんでもなくて、私たちさくらホームが考える「豊かさ」の条件は、「その存在が地域の中で認知されていること」。タミコさんが地域の中で、「タミコばあさんは地域の中で一人でウロウロしよるけど、それをみんなで見守っていかなあかんな」というようにタミコさんが地域の中でしっかり認知されていることが大事です。それから「その人がもつ役割や能力がしっかり活用されていること」。だから例えば、タミコさんがハイヒールを履いているのを見てびっくりして、「もっともっと歩行訓練しなきゃいけない」と、ちょっと私たちが手を出し過ぎていたんじゃないかということに気づいて、それから次のお正月が過ぎてからタミコさんはパワーリハビリをどんどん始めました。あとは、「地域の人と交流する共有の場があること」。私たちさくらホームが考えているのは、この３つが豊かさであり、その人が最後まで地域で暮らせる豊かさかなと思って色んな支援をし、共に暮らしています。ただそういうことをしようと思ったら、やっぱり地域の人の意志とか、そういったものを変えていかなきゃいけない。ということがあって、鞆の浦まちづくり塾、というものをこの夏に始めました。学習塾として色んな先生に来て頂いて講座することと、それからうちの施設で実習をして頂きました。一緒に訪問に行ったり、一緒にデイサービスに付き合ったり、いきいきサロンに参加したりしました。それから体験の場として一軒空き家再生して縁側づくりしました。この

3）鞆の浦まちづくり塾



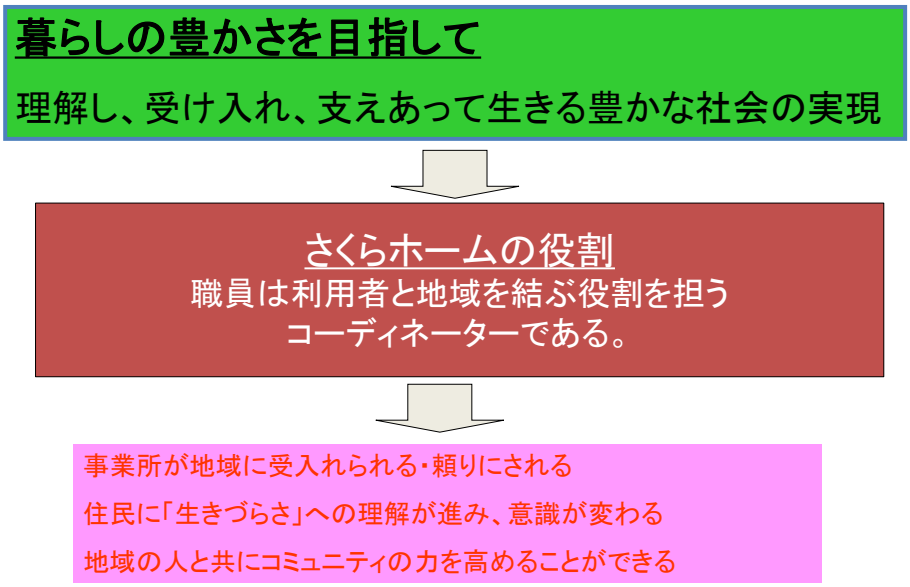
空き家再生
町内会の方々の力をお借りして

いろんな世代が交流できる場つくり

子ども園の夏祭り
ひきこもりの高校生大活躍

縁側づくりは地域の人や塾生と一緒にしていって、今も火・木・土とずっと開けてます。地域の人と塾生の人と一緒にしてくれています。それから体感の場としてしっかりお祭り

に参加する。お祭りの準備から参加することによって地域の人とどんな風に連携を取っていけばいいか、どんな風に気持ちを共有していくのか、っていう「互助を学び、地域共生を学ぶ」ということを目的に塾を始めました。その空き家再生の時に、ここがその場所なんですが、町内会の方々にお声掛けをして勉強会をしていたので「これはわしらが直してやろう」って言ってくれました。それから囲碁をしたり勉強会をしたりしたんですけど、奥の引きこもりの男の子達がこういう場をつくり、声をかけたら出て来てくれるようになって、子供園の夏祭りの時にこの子達が大活躍してくれたんです。それは私が今年で一番嬉しかったことなんです。この子達は二人とも 7 年ぐらい引きこもりだったんですね。塾にお願いして、「ちっちゃい子供の宿題をちょっと見てやって」とお願いして気が向いたら何回か来てくれたんですが、その夏祭りの時に駄菓子屋を出してくれ、って言ったら出してくれるようになったんですけど、その 2 人は三日寝れなかったんですよね。終わった後聞いたら一人は三日寝れなかったと言い、もう一人は四日も寝れなかったと言ったんですね。それに（駄菓子屋）を出す時も何時間も前から子供園の前で待っているんです。それでこの時、「5,000 円売れたら私が焼き肉食べ放題連れて行ってあげる」って言ったんですけど、この時 16,000 円売れたんです。でもうちの利用者さんが買いに行ったり、この子達が引きこもりだっていうことを地域の人達もある程度知っているのでみんなが応援したんです。それでこれからこの子達は変わっていったんです。これが私が今年一番嬉しかったことです。



暮らしの豊かさを目指して理解し、受け入れ、支え合っていける豊かな社会を実現したい、っていうちょっと偽善者みたいで、でも本当にちょっとでも豊かな暮らしができたらいいなと思ってやっていて、さくらホームは何をするかって言ったら、やっぱり利用者さんと地域を結んでいくことだと思っています。これが私たちさくらホームの役割で、これからの社会はこういうことだと思っています。ご清聴ありがとうございました。

東広島ワークショップ　講演２　渡邉　壽江氏

これは鯉のぼりが玄関に飾ってあるのですが、私たちの役目はいっぱいあって、伝えていく伝統を継承していくのもひとつ役割かなと思って鯉のぼりを近所から集めて、掲げています。これは利用者さんが日向ぼっこされてる、先程見て頂いたものなんですが、これも日頃の生活です。色んな行事がありまして、下の畑で芋を掘って焼き芋をしたり、無人の野菜市があったと思うんですが、そこで販売して、売り上げで何人かペアになって回らない本当のお寿司を食べに行かれました。また、そうめん流しをやってるんですけど、食べ終わったあと地域の子供会の方達がそうめん流しに来られて、一緒に交流されてます。

これは、夏休みとか冬休みにお習字教室を、利用者さんにご指導されてる先生が習字教室をされて、近所の子供達に指導している様子です。介護教室や認知症等のサポーター研修をやらせてもらっています。以前、収入格差がある中学生・高校生の子供達に無料で夜に学習塾をしてたんです。広大の学生さんが来て、週３回学習塾をして、３年程続いたんですかね。その時の子供達が利用者さんと一緒にクリスマスパーティーとかお好み焼きなどをして、学習塾に来た子がまず玄関に来た時利用者さんに「こんばんは」って言いますよね、ちゃんと靴を揃えて入って来て、そしたら利用者さんが「ちゃんと頑張って勉強して

えらくならにゃ」とか声をかけて下さるのでとてもいい感じで動いていました。キーパーソンの学生さんが卒業されてしまうと、継続が難しいんです。そこが課題だろうなと思って中断しているところですが、いつかやってみたいと思っております。

下の紙芝居のものは、私が広大の学生さん達や、暮らしネットの記者の方達と一緒に作った紙芝居が７つほどありまして、それを若年性認知症の方が、重度になられて今はいらっしゃらないのですが、学童保育とか幼稚園に行って紙芝居を読んでくださいました。この若年性認知症の方は文字を見て書き写す書写などはできないのですが、読む事はできて、見て読む事ができるので、紙芝居をしてもらおうと思いました。子供好きだとお聞きしてたので、学童保育に私たちと一緒に行って紙芝居を読んでもらっていました。それとか「明日への風」でご近所の子供達に紙芝居大会します、って言ったら、２０人ぐらい子供さんが来られました。作ったものもあれば既製品のものも色々ですけど、紙芝居大会をして彼女に読んでもらっていました。彼女に読んでもらう前にご家族にも本人にも了解を得て、認知症があります、と。だから皆さんが思っているような、スラスラとした読み方はできないかもしれないけれど、でも一生懸命読みますのでよろしくお願いします、と簡単なご挨拶をして頂いてます。自ら認知症と名乗って頂いて紙芝居したんです。でも現在、東広島市は、鰯の缶詰のように学童保育の子供達がものすごく多くて、ある時賑やか過ぎて、声を出しても聞こえないぐらい賑やかなんです。そしたらこの方が最後終わられた時に、「今時の子供は親の仕付けがなってないわね」と言われたんですよね。人の言葉の重さを感じます。
これはフラダンスなどのボランティアさんが来られたり、先生が来られて陶芸教室もしているんですが、これはご近所の方もおやつ代だけで参加出来ます。陶芸は材料費だけは頂きますが、そういうものもやってます。

これは雪がこんなにも降りましたよ、ということなんですが、花見をしたり、バイキングしたり、「ひょっとこ踊り」って言うんですけど、利用者さんも一緒に踊られたりということもしています。

これは普段の生活ですけど、ダイソーに買い物に行ったり、ドライブしたり、干し柿にしたり、また旅行に行ったり、去年初の試みで職員さんと利用者さんと一緒に温泉も入りました。それで、これは何年か続いて今はやっていないのですが、ここは米軍の基地および弾薬庫が近いので、米軍の方の方から大掃除を手伝いということを言って下さって、米軍の方が十何人来られて一緒にパーティーしたりして、大掃除も綺麗に手伝って下さって、良い交流だったんですが、米軍の予算が削られちゃって今は中止になっています。
これは先ほど言ったんですが、白いタオルで雑巾を縫ってます。そしてそれに「がんばれ」と文字をつけて 100 枚なり、50 枚なり揃ったらこうやって、もう既に十何箇所から 20 箇

所近く、利用者さんと一緒に持って行ってます。大変感動的な場面もあります。川上小学校では、3 年前から授業の一環として授業させて頂いていて、利用者さんが自ら先ほどの紙芝居をやって、歌や笛を吹いていらしたりしたんですけど、お互いに提供し合えるものを提供し合う関係の交流をさせて頂いています。先ほどの「がんばれ」っていう文字で涙ぐむ人もいたりして、先生なんかも感動して下さったりしました。

実はこれは夏祭りの写真なんですが、たまたま写ったんですけど、お父さんが子供さんを怒っていらっしゃるんですが、これから私は子供のことが気になり出して、ご近所の子供のことを今一生懸命取り組み出して、今広島県の引きこもり・閉じこもり委員もやらせて貰って、いつか子供のことをやってみたいなと思っています。

これは利用者さんのご家族様で、もう亡くなられてしまいましたが、娘さんのお孫さんが結婚の衣装で来て下さって、そのお祝いに来て頂いた時の写真です。
これは最後の写真なんですが、もう既に３，４人お見送りしているんですが、霊柩車が「明日への風」の前を通るんです。その時に職員が手を合わせています。この方が亡くなられた時に、「明日への風」の職員が、初めてだったんですけど、「裏から出ますか？」って聞きました。「なに言ってるんですか、玄関から出ましょ」って言って、その時に他の利用者様が何人かいらっしゃって、最後のお別れに来てもらいましょう、と。それでお部屋で横になっていらっしゃるところに、何人か入居者の方に来て頂いて、職員もお別れをして、最後、通いをされてた利用者さんもいらしたんですが、皆さんに「今この方が亡くなられたんです」と、是非皆さん、最後のお別れをして下さい、ということで、皆さんが手を合わせていらっしゃる中を、この方は玄関からみなさんから見送られてお家の方に戻られました。

私がこの「明日への風」をしたいなと思ったのは、先ほど言いましたように、小規模多機能が、一部屋 7.43 平米ですが、ある日、ひ孫さんと孫さんと息子さんとそれからお嫁さんと奥様とたくさんのご親族様がいらして小規模多機能で最後をお迎えになられた利用者様がいらしたんですけど、その時にまだ小学校低学年のひ孫さんが窓のカーテンで包まって利用者さんじゃない方を向いていたんです。半日以上もいたので退屈なんかなと思ったんです。下の子は走り回ってるし、上の子は退屈なのかなと思って見てたら、泣いてたんですね。カーテンで涙を拭いてたんですね。その後孫さんになられるお母さんが「このおばあちゃんの血はね、今亡くなったんだけど、だけどね、あなたの中にもお母さんの中にも、このおばあちゃんの血は流れてるんだよ」と言って、ご遺体の上に伏せられたんですね。その光景が今でも忘れられなくて、ひ孫さんにも孫さんにも子供さんにも亡くなられる瞬間を絶対に見ていただかなきゃいけないな、残すものは絶対に大きいなと思って、それでたまたまこのグループリビングの補助金を利用させて頂いて、お別れする場を作らにゃ、と思ってグループリビングをさせて頂いた経緯があります。

入居されている方の状況で、平成２２年から２７年のものなんですが、男性が０になっていて、全員が女性なんですけど、全体的には若返っています。介護度は、介護度自体は全体として重くなっています。２２年におられた方は、今は一人しかおられません。あとの方は亡くなられたり、特養に入られた方がおられます。特養とグループホームに入られた

方っていうのは、二人共遠いご親戚しかおられない方です。あまり近くないご親戚しかいないというお二人が入られました。また、看取りを何人かさせて頂いていると言ったんですが、やっぱり最期のお見送りは、ご家族の協力がないと、相当に難しいなと思っています。なくてもできないことはないのですが、良いお見送りをしようと思ったら、やはりご家族がおられて、ご家族としょっちゅう連絡が取れて、いつも来てくださるご家族が居る方が、良いお見送りができるような感じがします。たとえ家でなくても、十分良いお見送りはできます。

入居者数

	性別		年齢						介護度		総数
	男	女	65～74	75～79	80～84	85～89	90～94	95～			
H22.9	3	5	0	2	1	4	1	0	要支援1	1	8
									要支援2	1	
									要介護1	4	
									要介護3	2	
H27.11	0	8	2	1	0	4	1	0	要支援	0	8
									要介護1	3	
									要介護2	3	
									要介護3	2	

(単位:人)

平成27年 行事計画

		内 容
1月		初詣
2月		節分　豆まき
3月		ひな祭り　　川上小学校交流会
4月	外食	花見　(外出ドライブ)
5月		端午の節句
6月		クッキング　お好み焼き(大阪風)
7月		七夕　そうめん流し
8月		夏祭り
9月		敬老会
10月		運動会
11月	外食	紅葉狩り
12月		クリスマス会

これはどこにでもある行事ですけど、野菜を販売して、会食でお寿司を食べたりとか、温泉行ったりとかいろんなことをしています。こういう感じで過ごしております。

後でご質問があれば、是非聞いて下さい。ありがとうございました。

ー自由な暮らし・自分らしく共に住まうー
～震災から新たなつながりを求めて～

東日本大震災からのメッセージ

社会福祉法人　福島福祉会
高齢者生き活きグループリビングモーニング
施設長　清野　恭子

私の方から皆さま方にご挨拶の後にはなりますが、ちょっと福島県について、皆さまなかなか行く機会がないと思うのでご案内します。

福島県は北海道、岩手県に次ぎまして３番目に面積が広い県です。人口も全国で１８位ということで１９２万８千人が暮らしております。福島県の北東部にある福島市ですけども、東京から北へ２６０km、JR 東北新幹線で約９０分ぐらいの位置にあります。西は奥羽山脈、東は太平洋側にありまして、浜通りと言います。今回の東日本大震災の原発のある海側になります。そして、東側の阿武隈高地と西側の会津地方に囲まれて、浜通り、会津の丁度真ん中に位置する中通りというところが福島市の位置になります。現在福島県は１９２万８千人ですが、私たちの住む福島市は２８万３千人となっております。丁度福島市役所が、大震災の２ヵ月前の１月４日に３代目の新庁舎ができたばかりでした。そして市役所の国道４号線沿いの向かいには、東北では珍しく、JRA の競馬場が町の真ん中にありまして、休日ともなりますととても大きなレースがありまして、市内は凄い渋滞になります。福島は皆さまもご存知の通り、高村光太郎氏の「智恵子抄」にもあるように、あの福島の青い空が私の本当の空だと謳われたり、写真家の秋山庄太郎さんも「福島に桃源郷あり」と福島市にある花桃の名所、花見山と言いますけれども、こちらを世界に広めてくれました。震災前は県内外はもとより、海外からもたくさんのお客様がお見えになっておりました。

市内には今大きな温泉が３カ所ありますが、これからご案内致します「モーニング」も飯坂町というところにありまして、福島駅からは電車で約２５分、終着の飯坂温泉駅から歩いて１０分の田園地帯に位置しております。モーニングの周りはあとでご案内しますが、春には桜、そして果物さくらんぼ畑、周辺に白い花が咲き誇ります。そして桃の花のピンク色が絨毯のように広がります。そして秋にはぶどう、なし、りんご、そして今は柿が収穫される、まさに果物王国です。もちろんお米もおいしいです。そして福島市内を流れる荒川という川があるのですが、こちらは全国１位の水質を３年連続、そして東北地方でも１０年連続１位を維持しております。そして私たちが住んでいる福島市の高齢化率は今２６．３％です。私たちの「モーニング」がある飯坂圏域は３２．６％ということで、福島市の１０カ所の圏域の中で最も高いパーセンテージです。要介護認定者率も２１．２％と福島市内では共に最高ということです。

それでは説明の方に移ります。

第一部　～法人の歩み～

＜社会福祉法人福島福祉会の歩み①＞

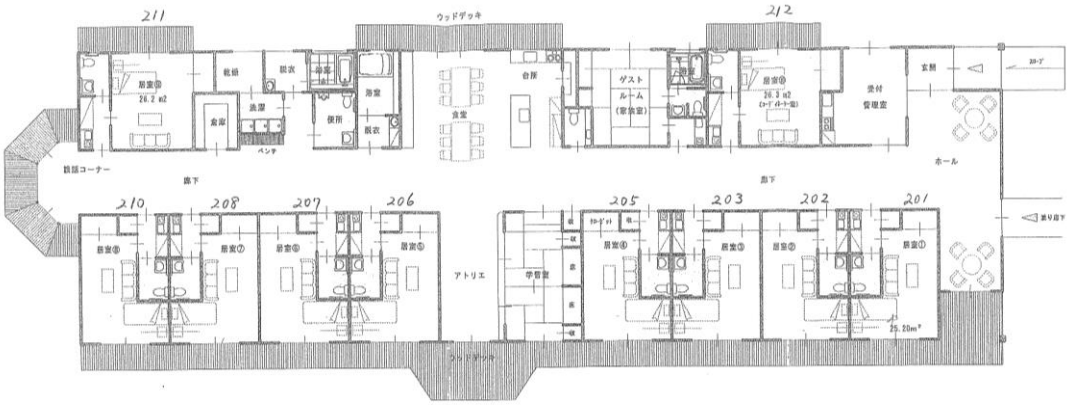
＊ 昭和63年　6月　社会福祉法人福島視覚障害者福祉会設立
＊ 平成元年　4月　養護盲老人ホーム　緑光園創設
＊ 平成 4年　1月　社会福祉法人福島福祉会へ法人名称変更
　　老人短期入所事業開始
・ 平成10年　4月　在宅ケアセンターグリーンライト開設
　　老人デイサービスセンターグリーンライト
　　老人介護支援センターグリーンライト
　　11月　ホームヘルプサービス事業開設
・ 平成12年3月　居宅介護支援事業認可

介護保険制度スタート

＊ 平成12年4月　指定居宅介護支援事業所・指定通所介護・
　　指定訪問介護・指定短期入所生活介護
　　開始
・ 平成14年7月　評議委員会の設置
・ 平成15年4月　福島県高齢者対策モデル事業
　　「高齢者グループリビングモルゲン」開設
・　　6月　福島市温泉利用介護予防事業
　　「湯ったりデイサービス事業」開始
・ 平成18年3月　居宅介護支援事業の再開
　　10月　外部サービス利用型特定施設入居者生活
　　介護（介護予防）緑光園　開始
＊ 平成19年　4月　福島市飯坂東地域包括支援センター
　　指定居宅介護予防事業　開始
・ 平成21年　3月　公益財団法人JKA（旧日本自転車振興
　　会）補助事業「高齢者生き活きグループ
　　リビング　モーニング」開設
・ 平成24年 2月　福祉避難所の指定（福島市）
　　11月　訪問看護ステーション　開設
　　12月　定期巡回・随時対応型訪問介護看護事
　　業所　開設
・ 平成25年11月　夜間対応型訪問介護事業所　開設

初めに、法人のこれまでの歩みということでございますが、お手元の資料の方から説明したいと思います。
こちらにありますけども、社会福祉法人福島福祉会ということで、当法人は社会福祉法人でございます。まず福島福祉会ですけども、昭和６３年に、福島にはひとつしかないのですが、全国では４４番目ということで盲老人ホームと言うことで、視覚に障害のある（盲人専用の）施設をつくったのが当法人のはじまりでした。そのあとに在宅ケアセンター、そしてホームヘルプサービスと、介護保険（制度）の前からこういったサービスを展開して参りました。平成１２年の介護保険が始まった時に居宅介護支援の事業も始めております。そして平成１２年、始まりました介護保険と同時にこちらの方の事業も開始しております。平成１５年になりますが、実は福島県の高齢者対策モデル事業ということで、福島県では当法人しか手をあげなかったのですが、グループリビングを国の方から補助事業として提唱されており、私は国の方でグループリビングということが考えられているのだと

いうことを初めて知り感動しました。というのは、高齢者は介護保険とか寝たきりとかある程度進まないと国の方は制度的につくらないということだったんですけど、これは病院でいう予防、予防医学なんですね。老人で言う介護ということで、そういったことで実はひとつすでにつくりました。そのあと、グループリビング、今回の「モーニング」建設につながりました。当時の理事長がお医者さんなので「モルゲン」というドイツ語（夜明けという意味）でちょっと分かりにくいということで、２つ目は「モーニング」ということで分かりやすい名称としました。そのあと、福島市に飯坂温泉があるということで、市より受託した温泉利用デイサービスを実施しております。あとは居宅事業も開始しております。さらに、相談業務、地域包括支援センター、そして今日皆さまにお知らせする２１年３月にJKAさんによりますグループリビング「モーニング」が２つ目ということで、グループリビングとしでは２つ目をつくらせて頂いております。そして先ほどお話した東日本大震災がありまして福祉避難所という指定を受けました。現在、グループリビングに入っている人が本当に高齢化になってきておりまして、４年、５年ということで、実はあとでご紹介する方もなかなか病院や老健から戻って来れないということで、早くおうちに帰りたいって言われたんですね。おうちっていうのはモーニングなんですけれども、やっぱり色んなサービスを入れないとその人を最期までお守りすることができないなということで、色んな事業を始めました。先程ありました定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業。これは、２４時間、看護師さんとかヘルパーさんが対応する事業です。これによりまして、どんな方でも、前のお二人にもあったように、最期までの看取りもできるという体制をつくりました。



これは法人でつくったモーニングの図面になりまして、うちも先ほど午前中見学された「明日への風」さんと同じように平屋でございます。見学された方で、「なんかモーニングさんと似てるね」なんて感想頂いたんですが、本当に天窓なんかがあってとても高くて、すごくいいんですけども、先程から皆さまの紹介を見ていて本当にいいなと思ったのは、お野菜をつくったり、お花をつくったりしてましたよね。実はうちも、こちらの方にすごい広い庭があるんですね。そこはまだ除染計画があるんですが、１０月か１１月に入りますってお盆の８月の時に来たんですが遅れてるそうなんですね。それでまだ手をつけないで下さいって言われていて、今の現状になっている状況です。実は早くそこを除染して頂いて、グランドゴルフ場とかお野菜とかお花のように、本当に見違えるようにして、地域の方をお招きしてバーベキューやろうね、とか、グランドゴルフやろうね、とは言ってるんですが、まだ市の方からのお知らせが来ていないので、羨ましい限りです。

そしてこれがモーニングのお部屋なんですが、大体１５～１６畳ぐらいです。先ほど見学したところと同じようにフローリングということです。そしてついているのがキャスター付きのキャビネット、あとは３段式ベッド、広いトイレと IH の台所がついています。

第二部　～モーニングの生活～

朝 ： ～ おはよう ～

それぞれの一日の始まり

デイサービス･お出かけ････

おはよう♪

こちらは一日の始まりということで皆さんごはんを召し上がったり、お散歩に行く方ですかね、玄関のところに立っています。あと一番右端の方なんですが、先ほどお話した老健に行って、早く戻りたいと言って戻ってきた方です。実はこの方震災の時に一人暮らしをしていて、おうちが崩壊したんですね。それで市の包括の方から、この方の対応できないでしょうか、ということでうちの方に来て、今元気に暮らしています。左側のベッドの方にある写真、自分が散歩に行っているときの写真とか職員の若い男の子とのツーショットの写真とか、毎日見ながらおはようと言って元気に笑っているんです、ということです。

その反対側の左側には、庭があるんですね。ここには桜の木があるんですけれども、山並みが見えるんですね。夕方伺うと「夕日が沈むのを見るのが、私一日一番の楽しみなの。」ということで、渡邉郁子さんっていうんですけれども、とてもニコニコされた方で、介護度５なんですけれども、お言葉もはっきり意思疎通できる方です。

昼 ： ～ こんにちは ～ カラオケ ・ 料理教室

そして日中になりまして、一番上、アップルパイを皆さんで作っているところです。下の左がたぶん太巻き寿司かなんかを作っているところなんですが、この左のメガネかけていらっしゃる方もやはり震災でおうちが壊れて、娘さん息子さんのところにしばし行ってたんですが、どうしても上手くいかないということでこちらの方に移って来られた方です。

あとは皆さんでカラオケをしたり、一番下に写っているピンクのような紫のような服を着ていらっしゃる方ですが、この方お元気なんですが最高齢なんです。大正８年生まれ。なので今９５～９６歳ということです。この方がモーニングができる丁度２１年３月の内覧会の時に来て、その時にすでに予約をしていた方です。それでこの方は飯坂町にある高齢者施設に６０歳で退職してから３０年間住んでいたようなんですが、９０歳を迎えるに当たって、是非モーニングの方で最期を、と次の自分の住処として望まれ、心待ちにされて４月１日のオープンで引っ越してきた方です。今でも元気でございます。

お散歩 ・ 入浴サポート等

こちらですが、本当に皆さんお散歩に行かれるんですよね。あとは先ほどお話したデイサービスが同じ敷地内にあるんですよね。なので皆さんお友達もいるということで行ったり来たりしてます。あとは近所の神社に散歩に行ったりということですね。それから、右の方も９３～９４歳の方なんですが、ヘルパーさんを利用しており、あんまりデイサービスに行きたくないということなので、こちらのモーニングで入浴サービスなどを受けています。

～納涼祭～　①地元高校生の吹奏楽

これは今年の夏祭りでしたね。玄関の方で地元高校生の吹奏楽部の方が来られているのですが、実はここの学校の生徒さんを職員として毎年採用してます。それでその縁もあって、生徒さんが後輩ということで吹奏楽部の皆さんが玄関の方で生演奏でやってくれてます。本当に皆さん心待ちにしてますね。

～納涼祭～　②飯坂太鼓　　③提灯の下で盆踊り

あとこれも夏祭りのもので、地元の飯坂太鼓の愛好会の皆さんが夜のイベントを盛り上げてくれています。すごい迫力です。あとは子供たちも呼びたいので、地域の人に多く参加頂きたいので夏まつりは土曜日にやってます。午後の３～４時ぐらいから夜の７～８時ぐらいまでやってます。その時の地域の愛好会の皆さんと子供たちや地域の方々が参加している感じですね。やっぱりこれも玄関の方でやってます。

これは私が撮ってと言った訳ではないのですが、先ほどの渡邉郁子さん、８６歳の方なんですけど、この灯りが付いていますけど、踊ってるんですよね、「私も踊るわ」って言って。あとは後ろの方には焼鳥屋さんやピザ屋さんが来てくれたり、後ろの電気がついているところでは射的をやったり、あとは包括もあるので血圧測定とか地域の方の色んな定期診断もやっております。あと、隣でなんで写真撮られたかと言うと、「焼き鳥焼けたかい？」って来たんです。

～敬老会～

晴れの日、皆さんが主役！！　合同敬老会での祝会先生方の踊り

あとこれが夏祭り終わって９月の敬老会ですね。飯坂支所の支所長さんが見えまして、皆さんの米寿とか喜寿とかお祝いしました。後ろに座っている皆さんは目が不自由な視覚障害者ということでちょっと違いますよね。前の御二人はモーニングの二人なんですけれども、それぞれお祝いの方を受け取っております。こういった行事は大体合同でやるということで、同じ敷地内にありますので皆さんおいで頂いて、みんなで楽しくやっております。

これが敬老会終わってからの余興ですね。皆さん踊りとか、詩吟とか舞踊とかこういったものも一緒に参加しております。

あとは先ほどもお話してますように、同じ敷地の中に併設しているデイサービスがあるんですね。それでデイサービスの方と一緒に地域の公園に行ったりしており、皆さんとても楽しそうに参加されています。「子供たちの声が聞こえて元気もらってきた」ということも言われています。

地区稲荷神社　お神輿秋祭り

あとこれは秋祭りです。地域の稲荷神社がすぐ近くにありまして、子供さんたちが御神輿を引いて来てくれます。緑光園の入所者さん、そしてモーニングの利用者さんが隣にいてジュースを飲んだり御神酒を頂いたり、本当に地域の皆さんによくして頂いております。

夕　：　～　おばんです　～
お食事終了後

定期巡回・随時対応型による夜間サポート

あと、夜。「おばんでーす」ということで、皆さん夕食を食べたり、先程お話したように定期巡回ということで２４時間サポート体制、あとは職員もモーニングの方では夜勤の職員が一人います。あとは何かあった時、万が一の場合、テレビ電話が機能しており、あとはペンダントを押すとオペレーター（職員）につながり、なんかあった時はすぐ駆けつけると言うことで皆さん安心してお休みになってます。

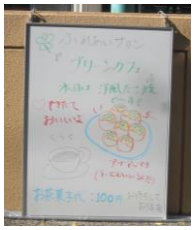
あと先ほどお話したように、この方、渡邉郁子さん、伊藤ヨシエさんもそうなんですけれども、震災があったということで、皆さん自分の人生でまさかこんなことが起こるとは思いもよらなかったことなんですが、伊藤ヨシエさんは絵手紙を手元に持っているんですが、こういったものを趣味・楽しみとしてやっていたものをここモーニングでもやって、百歳万歳という月刊誌の方に投稿しています。それで必ず出すと入賞するんですね。前回でのワークショップの時には、この方においで頂いて皆さんとお話頂いたと思うんですが、後ろにある温故知新とか隣にある絵も、全部この方が書いた作品です。季節ごとに入れ替えて飾ってくれています。

あと下の渡邉郁子さんは、夜のごはん食べた後の口腔ケアということでお口の中をきれいにして頂いています。

第三部　～新しい試み・地域の様子～

～グリーンカフェ～

モーニング入居者と地域住民との交流も兼ねたサロンの開催



あとは先ほどから地域の方々のお力で支えて頂いているんですが、新しい試みというか、地域に対してこちらからできることはないかな、ということで実は９月からモーニングの入居者様と地域住民の方々との交流ということでサロンを始めております。こういった感じでチラシを作って、老人会の集まりとか民生委員さんの会議や定例会の時なんかに持っていって、「いらっしゃってください」ということで声をかけています。あとはホームページの方でもアップしているんですけれども、これは私が書いた手作りの看板なんですけれども、玄関先の方に、「洋風たこ焼き」と書いてあるんですけれども、栄養士にたこ焼きや

る、と言ったら、「園長先生、たこは危ないよ」と言われて、チーズと干しエビを入れようということで作りました。地域の方からは一応お茶代ということで、１００円頂いております。

グリーンカフェへ　ようこそ

皆さんで和気あいあいで楽しんでいま～す♪

こういった感じで地域の方、それから入居者さんとやっております。あとは体操やったり血圧測定やったり、地域のボランティアとか民生委員さんも手伝ってくれて、「園長先生やるんなら一緒にやろう」なんて言ってくれて一緒に和気あいあいとやっております。来週はマイクリスマスケーキを作るなんてことになっています。

～復興住宅～

今仮設住宅のことなんですが、仮設住宅から復興住宅になってきています。もう仮設住宅には住めないんですね。腐食したり、隣の部屋からコンビニのビニール袋のカサカサという音がするんですよ。考えられますか？仮設住宅って住宅なんですね。私は仮設の掘っ立

て小屋だと思ってました。私も一回行ったんですけど、たまげました。あれだとストレスと言うか、もはやうつ病になっちゃうんじゃないかと思いました。それで仮設から復興住宅ということで写真が２枚あるんですが、つくった時にびっくりしたんですが、エレベーターが左側にはないんですね。それで復興住宅で４階建てですよね、って言ったら、誰も２階から４階応募がない、って言っていて、入って来ないですよね、特に高齢者の方は。１階にしか入って来ない。それであとから右側にエレベーターを外付けで作ったんですね。参っちゃいますよね。これが今の福島なんですよ、皆さん。それで私も中入ったんですけども、普通の市営住宅と同じで憩いの場とかあると思うじゃないですか。何もないんです。前の仮設住宅よりもお隣ご近所さんが分からないって言ってますね。がっかりなんです。

～飯坂温泉駅～（最寄駅）

それで先ほど言ったように福島から来て終点の駅なんですけれども、飯坂温泉駅から１０分ということで、こういった松尾芭蕉さんの銅像があります。温泉駅に降りまして先ほどからお話しているように本当に福島から皆さまに感謝を込めてということなんですけれども、現在モーニングは５年７ヵ月を経過しております。今回の東日本大震災そして原発事故には、浜通り地区からの被災者の方、また市内の独居住宅の崩壊や家族との同居困難者の緊急受け入れを致しております。先ほどあったように、それぞれ十人十色の人生模様、これはモーニングがこれから始まるもうひとつの我が家ということで皆さまに捉えて頂いているのかな、と思います。

そしてグループリビング「モーニング」の中のゲストルームですが、こちらは畳で１０畳、バス、トイレ、キッチンがついているのですが、これが今回の震災の時に一番役に立ちました。あの時全国のボランティアさんが、北海道から大分まで駆けつけてくれたんですね。もしこのモーニングのゲストルームがなかったら、たぶん皆さんを支えることが職員だけでは到底無理でした。やっぱり市内からも受け入れたし、近所の方も２０数名、あとは浜通りの方からも寝たきりの方や、認知症、精神疾患の方も来たので、ホールのパブリックスペースの方が日赤の方からベッドを頂いて入れて、ありとあらゆるところに来て頂いたんですね。職員も倒れそうなくらいだったんですけれども、先ほどご紹介した盲老人ホームの会長の方から電話があったんですね。「清野さん、東北の方は、我慢強いのはよくわかるよ。でも、我慢して良い時と悪い時があるよ。そういう時はきちんと人の助けを借りていいんだよ。」と言われました。それで会長が全国の盲老人ホームに電話をしてくれて、北海道から大分まで毎週２人ずつ、いつまでも甘えることは出来ないので、次の職員が見つかるまでお願いします、ということでお願いしました。本当にこのゲストルームがあった

おかげで、入っているモーニングの入居者さんにとっても、もう朝昼夜寝起きを共にして、時には親子のように、またお孫さんのように、皆さんとの生活の中で震災や原発の不安があったと思うんですけど、和やかにお過ごしすることが出来ました。本当にそういった意味ではメンタル的な部分まで支えて頂きました。私たちもこの未曾有の大震災、原発事故の中でもやはり人が支えてくれるという強い心と前を向いていく力、そして全国のたくさんの方々から勇気を頂きました。これからも福島は、未来の子供たちに希望を繋げていけるように私たちも前を向いていきたいと思います。本当にご清聴ありがとうございました。

発行日　2016 年 3 月 20 日
発行元　社会福祉法人福島福祉会
清野恭子
〒960-0211
福島県福島市飯坂町湯野字梁尻 1-1

この訪問記は（財）JKA の補助事業「お年寄りが幸せに暮らせる社会を創る活動」で作成しています。